



岩波文庫

703—705

芭蕉連句集

小宮豐隆編

岩波書店



岩波

昭和二十五年十二月十日 第一刷發行
昭和二十七年三月十五日 第五刷發行

芭蕉連句集

臨時定價百貳拾圓

編者 小宮 豊隆

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
岩波雄二郎

印刷者 東京都新宿區市ヶ谷加賀町一丁目三番地
村尾 一雄



發行所

東京都千代田區
神田一ツ橋二ノ三

株式會社

岩波書店

昭和二十五年一月設定★一ツ參拾圓
昭和二十六年六月臨時★一ツ四拾圓

落丁本・飢丁本は
お取替いたします

大日本印刷・榎本製本

岩波文庫

703—705

芭蕉連句集

小宮豐隆編



岩波書店

芭蕉連句集

外篇

『梅の牛』延寶四年

奉納之百韻

此梅に牛も初音と啼つべし
 ましてや蛙人間の作
 春雨のかるうしやれたる世の中に
 酔みそ交りの野邊の下萌
 摺鉢に若紫のすりごろも
 庭働の男置^キけり
 眠のひらけ懸りし二日月
 爪立て行足曳のやま
 五寸ほど手の届かざる歌の道

芭蕉庵
桃

青

葉堂
信

青同章
 青同章
 青同章
 青同章
 青同章

ひとかゝる餘り住よしの松
 淡路島さつと咄のよそに見て
 友呼千鳥笑ひ聲なる
 去程に面白鷺の權之亟
 森の下風さはくくと
 眞葛原踏れて這ふて逃に覺
 蟲鳴までにむごう靡かぬ
 戀の秋爰にたとへの道ぞとよ
 吉祥日のそれ程の月
 あつらへの嬰珞かゝる山かづら
 松の嵐の響くに似たり
 大黒の袋は花にほころびて
 青海苔もろき天竺の衣
 今朝の雪は貧女一錢が糊を解ク

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

風進退を削る竹べら
 臍の尾を吉原通ひ切り果る
 ほりこむ返事うらめしの中
 地にあらば石臼など、誓てし
 末の松山莖漬の水
 千賀の浦鹽釜居ん場の隅
 雪隠さびて見えわたるかな
 近適にこと問ふものは下駄の音
 猶山ふかく入し水風呂
 よしやよし小糠袋の濁る世に
 千里をかける馬士はあれ共
 雨の月見ぬ六道の札の辻
 焰魔の町く引渡す霧
 煩惱の本綱中綱末の露
 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章 青章

富士の嶽頂く雪を剃こぼし	此山一つ隠居料にと	土も木も三間ばかりに野づら石	公儀の掟はのがれたまはず	大無盡世尊を親にとり立て	もゝとせの餓鬼も人数の月	事あらば瘦たれどあの華薄	鎧は毛切虫は音を入れ	鏝目貫朝の霜に朽はてゝ	上野浅草竹の春風	花を踏で雀は千の御歩の衆	諸鳥の小頭鶯のこゑ	谷の戸を叩き起して觸流し	人足あれば山姥もあり
章	同	青	章	青	章	青	章	青	章	青	章	青	章

人 穴 ぶ か き 早 桶 の 底
 蝙蝠 や 三 角 の 紙 の 散 迷 ふ
 山 椒 粒 や 胡 升 な る ら ん
 小 枕 よ こ ろ く ぶ し は 引 た ふ し は
 臺 所 よ り 下 女 の 呼 ご ゑ
 通 ひ 路 の 二 階 は 少 し 遠 け れ ど
 か し こ は 揚 屋 高 砂 の 松
 取 な り を 長 柄 の 橋 や つ く る ら ん
 能 因 法 師 御 若 衆 の と き
 照 付 て 色 の 黒 き に 侘 け ら し
 賜 も ち の 木 乃 伊 眼 前 の 月
 飢 饉 年 弱 り 果 ぬ る 秋 の 昏
 多 く は 傷 寒 萩 の 上 風
 一 葉 宛 柳 の 髪 や 禿 ぬ ら ん

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

是も虚空を這し蝸
 判官の身は浮雲の定なき
 時雨降をくむかし淨瑠璃
 重くれたらうさいかたばち山の端に
 松吹風や風呂屋ものなる
 君爰に紅の二布の下紅葉
 契りし秋は産女也けり
 月すごく草履の鼻緒中絶て
 河内の國へ通ふ飛石
 四疊半屑屋の里も浦近く
 浪に蘆墻仕つたり
 時は花入江の雁の中歸り
 やはら一流松に藤まき
 いでさらば魔法に春を止め見よ

青 同 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青

七 厘 暗 く 入 相 の 鐘
 藥 鍋 三 井 の 古 寺 汲 あ げ て
 落 さ せ ら れ し 宮 の 打 疵
 階 の 九 ツ 目 よ り 八 ツ 目 よ り
 湯 立 の 釜 に 置 合 せ あ り
 既 に 神 に じ り あ が ら せ 給 ひ 覺
 白 髭 殿 は 御 年 よ ら れ て
 つ く く と 向 ふ に 居 る 鏡 山
 わ け 入 ル 部 屋 は 小 野 の 細 道
 忍 ぶ 夜 は 狐 の 穴 に ま よ ふ ら ん
 油 に あ げ し ね づ 鳴 の 聲
 唐 人 も 夕 部 の 月 に う か れ 出 て
 古 文 眞 寶 氣 の つ ま る 籀
 酒 の 露 た は け 起 て 白 雲 飛 々

青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章 青 章

天狗だふしや人の倒れや
 直の弱き杉の大木大問屋
 跡をひかへて絲荷よりくる
 秤にて日本の智恵や懸ぬらん
 叢の玉をつらぬかれけり
 花に破籠麓の里は十團子
 日坂越れば峰の早蕨

章青章青章青章

二 『江戸三吟』延寶六年

あら何ともなやきのふは過てふくと汁

桃 青

寒さししさつて足の先迄

信 章

居あひぬき霰の玉や亂すらん

信 徳

拙者名字は風のしのはら

青

相應の御用もあらば池のほとり

章

海老ヒこまじり折節は鮎

徳

醤油の後ハは湯水に月澄て

青

更ウてしハばハくハ小便の露

章

きハ耳や餘所にあやしき萩の聲

徳

難波の蘆は伊勢のよもいち

青

屋敷方あなたへざらりこなたへも

章

爲替カモ小判や袖にこぼるゝ
 ものぎはよ理コトハりしらぬ我泪
 千鱈四五枚是式の戀を
 寺のぼりおもひそめたる衆道とて
 短きこゝろキリで肩カクつく
 ぬか釘のわづかのとを云つのみ
 露がつもつて鐘カネ鑄イの功德
 うそつきの坊主も秋やかなしむらん
 その一休にみせばやの月
 花の色朱シユ鞞サヤを殘す夕間暮
 二
 芳野川春もながるゝ水茶碗
 紙袋より粉雪とけゆく
 風青く楊枝百本けづるらん

青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章青徳章

野郎ぞろへの紋のうつり香
 双六の菩薩も爰に伊達姿
 衆生の錢をすくひとらるゝ
 目の前に島田金谷の三瀬川
 から尻しづむ淵は有けり
 小蒲團に大蛇の恨み鱗形
 かねの食繼湯となりし中
 一二猷跡は淋しく暮過て
 月はむかし親仁友達
 蚕キク無筆な侘そきりぐす
 胸ミウ箒用の薄みだるゝ
 勝負もなかばの秋の濱風に
 われになりたる波の關守
 あらははれて石魂忽飛千鳥

章 德 青 德 章 青 德 章 青 德 章 青 德 章 青 德 章

ふるい地藏の茅原更ゆく
 鹽賣の人かよひけり跡見えて
 文正が子を戀路ならなん
 今日より新狂言と書くどき
 ものにならずにものおもへとや
 或時は藏の二階に追込て
 何ぞととへば猫の目の露
 月影や似せの琥珀に曇らん
 隠元衣うつゝか夢か
 法の聲即身即非花散て
 餘波の雁も一くだりゆく
 上下のこしのしら山薄霞
 百萬石の梅匂ふなり
 むかし棹今の帝の御時に

青章 德章 青章 德章 青章 德章 青章 德章 青章 德章

守隨ぎはめの哥の撰集
 掛乞も小町が方へといそぎ候
 これなる朽木の横にねさうな
 小夜嵐とぼそ落ては堂の月
 古入道は失にけり露
 海尊やちかいころ迄山の秋
 さる柴人がと葉の色
 繩帯のそのさまいやしとかゝれたり
 これぞ雨夜のかち合羽なる
 飛乗の馬からふとや時鳥
 森の朝影狐ではないか
^{三ウ}二柱彌右衛門とみえて立がくれ
 三笠の山をひつかぶりつゝ
 萬代の古著かはふとよばふなる

青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章 青徳章

質のながれの天の羽衣
 田子の浦波打よせて負博奕
 不首尾で歸る海士の釣舟
 前は海入目をあらふうしろ疵
 松が根枕石のわたとる
 つゞれとや仙女が夜なべ散モシガ艶
 瓦カ燈トウの烟に佛の月
 我戀を鼠のひきしあしたの秋
 泪じみたるつぎぐれの露
 衣装繪の姿うごかす花の風
 匂ひをかくる願主しら藤
名鈴の音一貫貳百春くれて
 片荷はさいふめては香久山
 雲介がたなびく空に來にけらし

徳章 青徳 章青 徳章 青徳 章青 徳章 青徳 章青

幽靈となつて娑婆の小盗み
 無縁寺の橋の上より落さるゝ
 都合その勢萬日まいり
 祖父祖母早うつたてやものどもとて
 鼓をいだきわらぢしめはく
 米袋口をむすんで肩にかけ
 木賃のゆふべ風の三郎
 韋駄天もしばし休らふ早飛脚
 出せや出せとせむる川舟
 はしり込追手顔なる波の月
 すは請人か蘆の穂の聲
名ウ物の賭振廻にする天津雁
 木鐘子の尻山の端の雲
 人形の鉄の下よりゆく嵐

青章 徳章 青章 徳章 青章 徳章 青章 徳章 青章 徳章

島にかはる芝居淋しき
此翁茶屋をする事七度迄
住よし諸白砂ごしの海
淡路瀉かよひに花の香をとめて
神代このかたお出入の春

執 德 章 青 德
筆

四 『詳譜次韵』延寶九年

表題

晋、伯倫傳、酒、德、頌、

樂、天繼、以、酒、功、讚、

青、醉、之、續、信、德、七、

百、五、十、韻、二十句五

挨 拶 を 爰 で は 仕 た い 花 な れ ど
又 か さ ね て の 春 も あ る べ く

桃 青

鷺 の 足 雉 脛 長 く 繼 添 て

這 句 以 莊 子 可 見 矣 其 角

禪 骨 の 力 た は へ に 成 ま で に 才 丸

しばらく風の松におかしき 楊
 夢に來て 躰イヒキを語る郭公
 灯心うりと詠じけん月
 微雨コサ 麻がら山の木の間より
 粟に稗シさく黍原の守り
 侘雀ウ畫眉カガを客によびけらん
 慈サイ悲イ齋サイが閑ツレつれぐに
 風フウの乞食イに軒ツの下を借ス
 先祖を見知ル霜の夜語リ
 灯火をくらく幽靈を世に反カハス也
 古きかうべに鬘カツラ引かけ
 武士の双ヤイ祭イハヒを荒にける
 女はなくに早きとていむ
 様あしく鏡のひづみたる恨ミ

水角青丸 水角青丸 水角青丸 水角青丸 水角青丸 水角青丸 水角青丸 水角青丸

心の猫の月を背ける
 露に寐て且易馴易忘
 乳なしの穀のかへる葛のは
 春秋を花と喰とに暇なき
 白魚をかざすより餅春の宴
 寛平のおゝん俳諧合あり
 衛士挑灯を枕して睡る
 はしたなりける女房の聲更て
 血摺のねまき夜や忍ぶらん
 別れ來しむくろは起てたよくと
 獄囚正を物くるはしむ
 天帝に目安を書て聞へあげ
 桂を堀つて星種を植
 雨の擔子風のかますの冷かに

水青角水丸角青丸水青角水丸角

秋シロキに對して所帶堂の記
 白シロキ親仁紅葉村シに送レ聲ムナ
 漁イサリの火ホ影鯛ウツを射ルキ
 師シ魚イサは諫イめ鰻ウナは胸ムネを割サカレける
 安ア房フの御ミ崎サキに流人身ナガを泣ナク
 名ナ向ムカ後ノチにて行キヤウ徳トク寺ジの晚イ鐘ネを
 枸ク杞キに初ハツ音ネの魂タマ鳥トリの魄クワク
 戀コイ人の袂タビに似ニたるかりぎかな
 雨アメをくねるか夏風ナツカゼがつま
 夕ユフ暮ヨは息イに烟ケを吐ハク思オモひ
 民タタ屋ヤあつて腹ハラをせばむる
 笑ウツの木キ愁ウレシる草クサの野ノは味アジく
 亦モト露ツキ分ワる娑婆サバの古コ道ミチ
 月ツキ見ミけん高タカ雄ヲが手テ向ムカ嬉シしくて

角ツノ水ミヅ丸マル角ツノ青アヲ丸マル水ミヅ角ツノ青アヲ丸マル水ミヅ角ツノ青アヲ丸マル水ミヅ角ツノ青アヲ丸マル

幣 花 朝 脱^{スネ} 哀
 に に 枕 置^{スネ} れ
 巢 照 に。 小 袖 文
 作 太^{オホ} と 袖 よ 何 と 躍
 る 神^{カミ} め。 を と 物 い は
 託^{コトツケ} の 奇 特 也 ぬ 夜^ヨ
 の 奇 特 也 ぬ 終^{スヘ}
 鳥 也

角 青 丸 水 青

五 『俳諧文韻』延寶九年

鴈にきけといふ

五文字をこたふ

春澄にとへ稻負鳥といへるあり

ことし此秋京を寐覺て

月を連に坐烏帽子をかぶる也

笹に徳利を折かたげしや

おぼこさす川添草の葉をしごき

卑山路に錢とらせきる

夕こゆる關をかますにかくれ來て

夜盜松風の音を相圖に

其角

才丸

楊水

桃青

丸

角

青

水

雨の闇にすけて敵を討せたる
 舞臺に柴の菴しほり戸
 とひやう仁うは氣より世を驚て
 犬切つて其聲のかなしく
 ねざま侘て雪の爐に根深アケルム
 あらしはいづく帳の紙室ムロ
 女の影歸ると見えて跡すごく
 若衆氣にしてやつれ凋シホるゝ
 ストント。茶入落しては命とも
 とりあへず狂哥仕る月
 秋の末つかた嵯峨野を
 とをり侍りて

薄の院の御陵サキをとふ
 兎飼舎人は花に隠るめり

丸青水 丸角水青角丸青水 丸角

子^ニ丑^スの番を寅に預^ケて
 渾^ヘ沌^ツ翠^ヒに乗^リて氣に遊^ブ
 朝^{アサ}咲^{スミ}しらむ馬^ハ鹿^カ々々の山
 雲の別れ女房に髭のある有けり
 吉原君をぬすみいざなふ
 棒^{ホウ}軍^{クニ}勇^{ウイ}やつふせぎ止まつて
 つきうすの陰より梓^{キネ}に弦^{ヅル}引
 富^トの屋を徳明王の守ります
 摩^マ訶^カ右衛門苦^ク奈^{ナイ}國^{コク}に生^ル
 愛^アヲ捨^シ子^シヲ捨^シ毘^ヒ盧^ル遮^{シヤ}阿^ア毘^ヒ羅^ワ吽^{ウン}
 嵐と落^レて風はやり吹
 夜の食^{シヨク}乏^{トガ}しくね覺^ケける比^ヒは
 蚓の音さへ耳に腹^{ハラ}たつ
 月の秋うらみはこべの旦^{ツク}夕^セて

角青水 角青水 角青水 角青水 角青水 角青水 角青水

露ニウにしがらむ妹が落髪
 物いふて鏡に貌の残り見えよ
 繪と酒もりの興ケウ盡て泣ナク
 小袖かす木枕に帶さうぞきて
 納戸の神をモノイシ齋し祭サニ
 煤ス掃ハク之禮ニ用ユ於鯨之脯ホシハタ
 やとひの翁齒朶刈に入
 風いたく牛さへ氷る也けるに
 荒屋に馬の枯屎をたく
 慄ソッしと白骨のかね付て居たる
 曾呂利新話を讀に夜長し
 禪小僧とらふに月の詩ヲ刻ム
 雷スリ盆バチ鳴て芭蕉には風
 花の今朝驛エキに羊を直切る也

青丸角 青丸角 青丸角 青丸角 青丸角 青丸角 青丸角 青丸角

樓にわらぢをつるす比春
 所^三帯わび息はこそぞの雪を掃
 笑を著て寒く雀とるらん
 凧のからしの枝に薬干せん
 山彦嫁をだいてうせけり
 忍びふす人は地藏にて明過し
 木^ム槿^キのまなじり木^ボ瓜^ケの唇^{ウチヒ}
 細殿に鬼^{オニ}灯^{ツキ}の燈籠照したる
 をどり狩衣の裾にたつ波
 酒の月お伽坊主の夕ばへて
 眞桑流しやる奥の泉水
 河骨^{カホネ}の葉にほれ哥を書やつす
 ほむらにたえて蛇兒と化^ケ
 筑地ある根の底に車引止め

青角丸 青水丸 青角丸 青水丸 青角丸 青水丸 青角丸 青水丸

天^{ミウ}火^ホ々^々闇^闇の金掘の尊
 蜺江の磯等岸等は白波に
 青海苔うたひ鱒琴を弾^弾
 花の管屋芝に旅泊を賞^賞る
 月に秋とふ東^{トウ}金^{カネ}の僧
 淋しさを蕎麥に露干す豆俵
 夕顔重く貧居ひし。げる
 桃の木に蟬鳴比は外に寢み
 枕の清水香薷散くむ
 夢の身を何と鯉にさめかねて
 我聞^{我聞}。俗は口にきたなき
 生^イづらを蹴^蹴折^折かれては念無量
 泥坊消て雨の火青し
 草の奥下妻が原にくれかゝり

丸青水 丸角水 青角丸 青丸 水角丸 水角丸 水角丸

狄^{エビス}の里の足あらひ鍋
 配^名所人蘆の小著布を干かねて
 あらめの茵^{シトネ}辛^ユ螺^シを枕と
 心地やむ鯛に針さす生小船
 まれに尾だきを出し山老
 麥^{バク}星^{セイ}の豊^{トヨ}の光を覺^{サトシ}けり
 勅使芋原の朝臣^{カサ}蕪^カ房^フ
 秋を啼鳥の鳥を迎^{ムカ}へせし
 夏やきのふの郭公さに
 津の國の生田の森の初月夜
 道さままたげに乞食^{ネクラ}接^{ネクラ}す
 霜^{フユ}下^マて更行里の粥^{カユ}配^{クハク}
 寺々の納豆の聲あした^{クエ}
 よすがなき栞花賣の老を泣^{ナク}

角 青 水 丸 角 水 丸 青 水 丸 角 水 丸 角
 讀人不知

團ヲ炭ト荷ヲふて小野に歸りし
 臙名ヲスネをぞ洗ふ臙の清水影迎は
 茂みがくれに牛逃したる
 竹の戸を人待下女が寐忘れて
 打ぞつぶてに恨み答へよ
 泪のみすほんくと鳴をれば
 千とせをくさる水の埋木
 葉傳ひて寸ス龍花に登るか
 如泉法師が春力あり

青角丸水青丸水青角丸水

六
 『俳諧次約』延寶九年

世に有て家立は秋の野中哉
 才丸
 詠置月にかぶ萩を買
 楊水
 哀とも茄子は菊にうら枯て
 桃青
 鮎さびすたり海鼠漸
 其角
 雪の客麩の客とふるまへば
 水角
 蘇鐵の亭に題を設
 丸角
 樂やつこ隠れて風流林とよぶ
 青角
 樽に羽織を著せてあふぎし
 青丸
 嬉しきや女房のせいて泣付を
 丸
 戀あぶれたる弟手討に
 水丸
 音更て旗の板戸をこち放
 青丸

枯ゆく宿に冬子うむ犬
 髮結の住けん庭は蓬して
 卒都婆の男ゆかた凋^{シホ}る
 骨^{ツボ}刀土器鏝^{シノ}のもろきなり
 瘦たる馬の影に鞭^{むち}うつ
 内に寐ても心はきのふ羈^{くわ}旅^{りょ}
 米とぐ音の耳に露けき
 扱^あもかびて簀子^{すし}折たく秋しもぞ
 無^ム錢^{セン}居^イ士^シとて朝深き月
 筆^{ヒツ}耕^ケ青^{キョウ}磁^ジの牛に花付て
 燕^ニ茶^チ水^{スイ}の流れくむらん
 后宮のやぶ入車やどりふる
 ねたしや上^ウの御若衆の様
 頭巾かつぎさげて。夜の雪踏の忍ぶ音

角丸 水丸 角丸 青丸 水丸 青丸 角丸 青丸 水丸 角丸

挑灯切つて霜のかげろひ
 風前の角内と身を悟りける
 入^ルの山ぶみ狼にのり
 雷の斧^{ハチ}丁々として音さら
 玄^{フカ}又玄し龍頭の國
 俗のいふ鹿島の海の底なるや
 朝^{アサ}の日の東本地赤^{アカ}螺^シ
 何を覺て蛤の寐て夢見たる
 ひそか^カくと雨簑をもる
 月を葺^フ夕芋の葉の片軒端
 粟刈敷て團子干す比
 露^ニ鶏^{トリ}の羽がいの殻^{ヒヨコ}ひよくと
 水くみ起て帚尋ぬる
 釜かぶる人は忍びて別るなり

水青角丸水青角丸水青角丸水青角丸

髓を子にだくまぼるしの君
 古家の泣聲闇にさへなれば
 いたちの禿倉風の荒ぶる
 麻の葉に生る小鮎を折交て
 かた枝さすなる生の浦柚子
 きたなくて清き隣と住月に
 明て寐御座をかけ渡す露
 晝夢の食たく程に夕ぐるゝ
 人死を待て生たはいなし
 石カ曰ク花の目出度咲にけり
 木玉にかなで風を舞柳
 飛雨臺ノ跡ハ霞ニ空シキゾ
 驢馬ノ進マガル體キラくシ
 大根の葉越の關のこなたより

青丸 水角 青丸 水角 青丸 水角 青丸 水角 青丸 水角 青丸 水角

雪のから鮭に文付てやる
 衰へや火桶の姫ひめの腰寒き
 有侘し床にふとん引づる
 もやくと寐入かねくとくにたえて
 通はす首の泣てたゞずむ
 迷ひしれ恨が原の目かけ塚
 横雲別べつ之介修行し暮て
 今宵月に村風と申す三味線を
 やさしや薄泪こぼすか
 秋の霜腹切草をことはれば
 住持ゆるして明る柴の戸
 面白面白く三ウ盞さん曲を狂ひしに
 海老ちらしたる海苔のりの青衣あそぎ
 戀崎の松か娘の花の臺

丸角青 丸角青 丸角青 丸角青 丸角青 丸角青 丸角青 丸角青

契世にのこる雪の明神
 トウ問し鷺の翁のしらくと
 蛇の氣立て草の煩ワヅラヒ
 笹深き皇居にかりの紙帳釣ル
 清水の司ツカサ麥コナカをコナカ
 いつも參る法味寺の醬色ヒシホ殊に
 老尼はなしの敍ツイテありけり
 哀餘る捨子ひろひに遣ツカハして
 外ト里サトに鹿の裾スソ引て入
 松茸に道しまがへば枯いばら
 栗の梢コウノキにあり明のいが
 名 侘籠ワドリにコウノキの音をしのぶ成ル
 足袋さす宿に風霜を待
 扇折る女は夏に捨られて

角水丸 角水丸 角水丸 角水丸 角水丸 角水丸 角水丸 角水丸 角水丸 角水丸

夫は江戸に戀わすれさく
 むさし壹歩さすがにと讀てやみけり
 艶ニギハヤなる茶のみ所求めて
 夜々に來て上るり語る聲細ホソく
 法眼が書し武者繪とやらん
 宮造る虚ウソの匠クサビの名乗して
 鬘斗ウツを冠カウの纓エビに折かけ
 鱗ウナギなる翠簾スズリのうるめは枯カ残ゼンり
 故園コエン今とへば蘭ラン腥シメツし
 風の月熱の御靈ミマタを鎮シヅめける
 黄キなる小僧コソウの怪アヤしさよ露
名山路ウチノミチわくいぐちの笠カサを置忘シレ
 篠の枝折を猿サルにことはる
 岩彦イハヒコの栖カを深く立タのぞき

水 青 角 水 丸 青 角 丸 水 角 青 水 丸 青 角 水 丸 青

氣を奪れし人のぬけがら
血を踏つて風太刀を折る音
古杳をとつて野邊に枕す
行くれて花に夜著かる芝蔴
狐は酔つて酔に入る

角水丸角青

七
〔俳諧次約〕延寶九年

餘興

楊水

塵 ^チ 裡 ^リ	夜 ^ル	無 ^ク	附 ^ケ
の	貌 ^ノ	用 ^ノ	贅 ^ガ
の	の	の	一 ^ツ
四 ^シ	朝 ^ノ	枝 ^ノ	爰 ^コ
蟲 ^ノ	咲 ^ク	を	に
音 ^ヲ	花 ^ニ	立 ^シ	置 ^ケ
を	あ ^ラ	し	け ^リ
隠 ^ル	そ ^ヒ	犬 ^ノ	日 ^ク
る	ひ ^テ	蘭 ^ノ	露 ^ヲ
也			
才	其	桃	
丸	角	青	

八

〔武藏曲〕天和二年

錦とる都にうらん百つゝじ
 壹花さくらに番山ぶき
 風の愛三線の記を和らげて
 雨双六に雷を忘るゝ
 宵うつり蓋の陳を退りける
 せんじ所の茶に月を汲
 霧軽く寒や温やの語ヲ盡ス
 梧桐の夕孺子を抱いて
 孤村遙に悲風夫を恨むかと
 媒酒旗に咲を進ムル
 別るゝに馬手は山崎小銭寺

塵 塀

千春
 ト尺
 曉雲
 其角
 芭蕉
 素堂
 似春
 昨雲
 言水
 執筆

猶ほれ塚を廻向して過ク
麩時
袖桶に忘れぬ草の哀折ル
千春
小海老爪ツマ白母シロを慰む
ト尺
悴カシケたる鶯カウラの鬢カウラを黒やかに
曉雲
捨杭の精かいどり立り
素堂
行脚坊卒都婆を夢の草枕
芭蕉
八聲ハツシヨウの月に笠を揮ハタケ
其角
味噌樽にもる露深き夜の戸は
言水
泣ておのゝく萩の小女
昨雲
妻戀る花馴駒の見入スル
似春
柱杖ニに虵ヘビを切ル心春
千春
陽炎ニの形をさして神なしと
麩時
紙鳶シに乗リて仙界シに飛ビ
曉雲
秦の代は隣の町と戦ひし
其角

ねり物高く五歩に一樓
 露淡く瑠璃の眞瓜に錫スズ寒し
 蚊の聲 氈ニに血を含ムらん
 夜ヲ離レ蟻の漏ロより旅立テ
 槐のかくるゝ迄に歸り見しはや
 句落ツ杏アズに酒を買ところ
 強盜春の雨をひそめく
 嵐更ケ破魔矢つまよる音すごく
 鎧ヨロイの櫃ヒツに餅荷ひける
 末の五器頭ト巾キンに帯て夕月夜
 猫ニウ口ばしる萩のさはく
 朝顔アサガオに齋イツキまつりし馳チ姫
 藏守ソウシュの叟霜ソウジヨウを身に著ル
 此所難波の北の濱なれや

芭蕉 素堂 言水 似尺 芭蕉 似尺 昨雲 千春 麿時 曉雲 素堂 言水 芭蕉 似春

紀の舟伊勢の舟尾張船麩
 波は白浪さゞ波も又をかし素堂
 傾城に袴著せて見る心曉雲
 今宵年忘戀の榮を盡らん其角
 柎が枝に小哥たてまつりける昨雲
 庭稻荷殿テに隠れて仄ホナなるト尺
 いたらぬ役者藝冥加あれ千春
 豊さわぎ院に日待を催され芭蕉
 霞の外の權田樂をなむ召ス素堂
 紫の鱒を花に折ユツリハしきて言水
 しだのみ荒しユツリハの宿其角
 去年ウラの月の三十日の月くらし曉雲
 雪ものぐるひ筆を杖つくト尺
 山鳥の音に羽ぬけ子や尋ぬらん千春

鶴の箔衣キヌありし佛
 夢に入る玉落の籠雲の洞
 日を額にうつ不二の棟ネ上アケ
 松髪の祖父チ蔦上下に出立て
 城主に靈の蜜柑獻スル
 或トウラに火あての鯉生かへり
 旅小刀の吼ホエ脱スゲて行
 世捨木や世捨の松に名を朽て
 からすの衣堤にくらし
 橋キヤウ上の番太は鐘を恨みたる
 西瓜はしらず潮満らむ
 露くだるしだれ角豆の散柳
 月は筑地の古キにやどる
 遁世のよそに妻子をのぞき見て
 似春
 昨雲
 芭蕉
 麩峙
 峽水
 曉雲
 其角
 素堂
 嵐蘭
 千春
 曉雲
 麩峙
 芭蕉

月	無 <small>カラシ</small>	張 <small>名ハリ</small>	薫 <small>カウ</small>	御	雪	衣	燕 <small>ツ</small>	雨	時	是	百	步 <small>カキ</small>	つ
は	情	雀	ふ	池	ふ	装	尾 <small>バ</small>	を	な	此	姓	別 <small>レ</small>	ぎ
問	人	鳴	る	漕	ぶ	草	小 <small>コ</small>	聞	ら	年	の	馬	哥
つ	秋	子	ふ	扈	き	萌	勝 <small>カウ</small>	て	ず	先	家	は	耳
山	の	く	か	從	茶	出	が	放	米	祖	に	待	に
寺	秋	に	水	の	や	る	墓	下	に	の	入	ら	の
藏	の	お	引	渡	花	翠	に	の	生 <small>オフ</small>	楳 <small>ホタ</small>	て	ん	こ
を	の	ど	の	守	の	り	落	火	る	の	腹	椀 <small>モノキ</small>	る
離 <small>カレク</small>	の	ろ	義	し	端	紅	く	の	菌 <small>クサヒラ</small>	消 <small>クサ</small>	切 <small>キ</small>	陰	吉
に	蟬 <small>スゲガフ</small>	き	裳	ば	つ	に	る	エ				原	原
其	嵐	麩	昨	峽	其	麩	曉	素	千	昨	嵐	其	峽
角	蘭	塀	雲	水	角	塀	雲	堂	春	雲	蘭	角	水

石風呂の跡は哀ありける
 素堂
 箒木の茂きは歛ヨウに天せられ
 千春
 今其とかげ金色の王
 峽水
 袖に入アマレツ蜻夢を契りけん
 芭蕉
 涙の玉あり明ヶ昏レにかはかす
 麁堦
 我聞ケリ鈍士は胸の中黒しと
 昨雲
 閑思サツ君境町に溺るム
 其角
 肩を踏ツて短尺レとりに立サワ噪ケ
 曉雲
 奥ツルにての御遊隔ツル堀ツ戀
 芭蕉
 篝火を刀に掛ツて忍ぶ山
 嵐蘭
 浪名は井積ツにかくす落人
 千春
 物名あらふ盥ツをふせて暮る程に
 峽水
 藍搗カく白のゴほくし聲
 麁堦
 市賤カの木ビらヲ負ル木陰哉
 曉雲

日傘さす子と、姫ウメと男と
 玄關にて神樂をまふけ給ひけり
 夜と共てらす袋挑灯
 花の奥、盗人狩に泊トボリして
 入重く、霞飛行小天狗
 嵐
 昨雲
 素堂
 芭蕉
 其角

九 『虚栗』天和三年

憂^{テハ}方^ニ知^ニ酒^ヲ聖^一
貧^ハ始^テ覺^ル錢^ノ神^ヲ

花にうき世我酒白く食黒し

眠^ヲ盡^ス陽^カ炎^ガの瘦

鶴啼て青鷺夏を隣^{トナリ}らん

童子^シ磔^ヲを手折^ル唐^ノ梅

月^ヲ濁^ス汀^ノ蓼^ヲ蘆^ノ刈^テ

浪^ノのさ^ゞれにたなご釣影

琵琶^ヲ洗^フ雨^ヨし朝^ノ時^雨よし

朝^ニえ^ぼしを^フる^ふ紙^衣

芭蕉

一品

嵐雪

其角

嵐雪

筆

一品

芭蕉

浪人の戀するを誥ナフリおほしめす
 やぶの一夜に入ルかひぞなき
 散さくら同じ宗旨ヲ誓ひける
 藤は退下之が肝キモ魂クマを奪つ
 雷鳥のはつねは鶯ハシを鳴ルならん
 汐テてる海に鯉イコメ孕ミコメる
 傾城の鏡を捨し神代ヨリ
 羽をりに角ツノヲかくす風流フウリウ雄オス
 化しのの棺ヒツキを出て草の月
 破名蕉誤ツテ詩の上を次ツ
 朝鮮名に西瓜ウリヲ贈オクる遙ナリ
 つくししらぬひの松浦片撥
 めづら見るあげやくの萱庇
 蚤ササは私ナニの蓋カサをのむ
 嵐雪 嵐雪 一品 芭蕉 嵐雪 嵐雪 其角 嵐雪
 嵐雪 嵐雪 一品 芭蕉 嵐雪 嵐雪 其角 嵐雪

櫛入^レぬ影は六十^ツの荆にて 其角
 御所に胡^ア座^カかく世^ヲ夷^ウ也 芭蕉
 人の怪^イ異^イ穂長の宵の熨^子黒^ク 一晶
 松田くびなき雪の曙 嵐雪
 きたなしや陣中に似せ煎^{カク} 嵐雪
 山^ン野に飢て餅^ヲを貪^ムル 嵐蘭
 盗^ミ井の月に伯夷が足^あらふ 芭蕉
 とくさは武士の憤^{イキドコロ}草 嵐角
 見ぐるしき艶書をやくや柴^名柅 嵐蘭
 笑ひさんやに歸^ル魂 一晶
 曉の寐言を母にさ^まされて 嵐雪
 つるに發心ならず也けり 芭蕉
 花に栖廬山の列^{ヒツ}をはねたらん 其角
 柳にすねて瀑^ツ布^キ酒呑 嵐蘭

一〇 『虚栗』天和三年

酒債尋常往處有
人生七十古來稀

詩 あきんど年を貪ル酒債哉

冬 湖日暮て 駕馬鯉

干 鈍き夷に關をゆるすらん

三 線。人の鬼を泣しむ

月 は袖かうろぎ睡る膝のうへに

鳴 の羽しぼる夜深き也

恥 しらぬ僧を笑ふか草薄

し ぐれ山崎傘を舞

其角

芭蕉

同

同

同

同

同

角

笹竹のどてらを藍に染なして
 狩場の雲に若殿を戀
 一の姫里の庄家に養はれ
 廝名にたつと云題を責けり
 ほととぎす怨の靈と啼かへり
 うき世に泥む寒食の瘦
 杏は花貧重し笠はさん俵
 芭蕉あるじの蝶丁見よ
 腐れたる俳諧犬もくらはずや
 鰥々として寐ぬ夜ねぬ月
 名
 聳入の近づくまゝに初砧
 たゝかひやんで葛うらみなし
 嘲りニ黄金ハ鑄ニ小紫
 黒鯛くろしおとく女が乳

蕉角蕉同角蕉角蕉角蕉角蕉角蕉角蕉角蕉角蕉角蕉角蕉

枯藻^{クモ}髮榮螺^シの角を卷折らん
 魔^マの神^{カミ}を使^シトス荒海^{シラウミ}の崎
 鐵^{テツ}の弓^{ユミ}取^{トル}猛^{マウ}き世^ヨに出^デよ
 虎^コ懷^{アトコロ}に妊^ヤるあかつき
 山寒^{ヤマサムイ}く四^シ睡^{スイ}の床^{トコ}をふくあらし
 うづみ火^ヒ消^クて指^{ササ}の灯^{トウ}
 下^ケ司^ス后朝^{ゴウチウ}をねたみ月^{ツキ}を閉^ム
 西^セ瓜^{ウリ}を綾^{アヤ}に包^ツムあやにく
 哀^{アハレ}いかに宮城野^{ミヤジノ}のぼた吹^{フク}凋^シるらん
 みちのくの夷^ヒしらぬ石^{イシ}白^{シロ}
 武士^{ブシ}の鎧^{ヨロイ}の丸^{マル}寐^ネまくらかす
 八^{ヤチ}聲^{コエ}の駒^{ウマ}の雪^{ユキ}を告^ツつゝ
 詩^シあきんど花^{ハナ}を貪^ヒル酒^{サケ}債^{ツカ}哉
 春^{ハル}湖^{ミヅ}日^ヒ暮^クて鶴^{ツル}興^{キョウ}吟^{イン}

蕉同角蕉角蕉同角蕉角蕉角蕉角蕉角

芭蕉連句集

內篇

一 『冬の日』貞享元年

笠は長途の雨にはころび紙衣は
とまりくくのあらしにもめたり
侘つくしたるわび人我さへあは
れにおぼえけるむかし狂歌の才
士此國にたどりし事を不圖おも
ひ出て申侍る

狂句こがらしの身は竹齋に似たる哉
たそやとぼしるかさの山茶花
有明の主水に酒屋つくらせて
かしらの露をふるふあかむま

芭蕉

野水 荷分 重五

朝鮮のほそりすゝきのにほひなき
 日のちりくゝに野に米を刈
 わがいほは鶯にやどかすあたりにて
 髪はやすまをしのぶ身のほど
 いつはりのつらしと乳をしほりすて
 きえぬそとばにすごくとなく
 影法カクホウのあかつきさむく火を焼て
 あるじはひんにたえし虚家カクイ
 田中なるこまんが柳落るころ
 霧にふね引人はちんばか
 たそがれを横にながむる月ほそし
 となりさかしき町に下り居る
 二の尻に近衛の花のさかりきく
 蝶はむぐらにとばかり鼻かむ

杜國 正平 野水 芭蕉 重五 荷兮 芭蕉 杜國 野水 荷兮 芭蕉 重五 野水 杜國 重五 野水 芭蕉

わがいのりあけがたの星孕むべく
けふはいもとのまゆかきにゆき
綾ひとへ居湯に志賀の花漉て
廊下は藤のかげつたふ也

荷 野 杜 重
兮 水 國 五

二 「『冬の日』貞享元年」

おもへども壯年

いまだころもを振はず

はつ雪のことしも袴きてかへる
 霜にまたた見る 薺の食
 野菊までたづぬる蝶の羽おれて
 うづらふけれとくるまひきけり
 麻呂が月袖に鞆鼓をならすらん
 桃花をたをる 貞徳の富
 雨こゆる浅香の田螺ほりうへて
 奥のきさらぎを只なきになく

野水

芭蕉 杜國 荷兮 重五 正半 杜國 野水

床ふけて語ればいとこなる男 荷兮
 縁さまたげの恨みのこりし はせを
 口おしと瘤つぶをちぎるちからなき 野水
 明日はかたきにくび送りせん 重五
 小三六に盃とらせひとつうたひ 芭蕉
 月は遅かれ牡丹ぬす人 杜國
 繩あみのかじりはやぶれ壁落て 重五
 こつ くとのみ地藏切町 荷兮
 初はなの世とや嫁のいかめしく 杜國
 かぶろいくらの春ぞかはゆき 野水
名 櫛ばこに餅すゆるねやのほのかなる かけい
 うぐひす起よ紙燭とぼして 芭蕉
 篠ふかく梢は柿の蒂さびし 野水
 三絃からん不破のせき人 重五

道すがら美濃で打ける碁を忘る
 芭蕉
 ねざめくのさても七十
 杜國
 奉加めす御堂に金うちになひ
 重五
 ひとつの傘の下舉りさす
 荷兮
 蓮池に鶯の子遊ぶ夕ま暮
 杜國
 まどに手づから薄様をすき
 野水
 月にたてる唐輪の髪の赤枯て
 荷兮
 戀せぬきぬた臨濟をまつ
 はせを
名ッ
 秋蟬の虚カラに聲きくしづかさ
 野水
 藤の實つたふ雫ぼつちり
 重五
 袂より硯をひらき山かげに
 芭蕉
 ひとりは典侍ケの局か内侍か
 杜國
 三ヶの花鸚鵡尾ながの鳥いくさ
 重五
 しらかみいさむ越の獨活芍
 荷兮

三 『冬の日』貞享元年

つえをひく事僅に

十歩

つゝみかねて月とり落す霰かな
 こほりふみ行水のいなづま
 齒朶の葉を初狩人の矢に負て
 北の御門をおしあけのはる
 馬糞か搔かあふぎに風の打かすみ
 茶の湯者おしむ野べの蒲か公か英
 らうたげに物よむ娘かしづきて
 燈籠ふたつになさけくらぶる

杜 國

重五 野水 芭蕉 荷兮 正平 重五 杜國

つゆ萩のすまふ力を撰ばれず
 芭蕉
 蕎麥さへ青し滋賀樂の坊
 野水
 朝月夜双六うち旅ねして
 杜國
 紅花買みちにほとゝぎすきく
 荷兮
 しのぶまのわざとて雛を作り居る
 野水
 命婦の君より米なんどこす
 重五
 まがきまで津浪の水にくづれ行
 荷兮
 佛喰たる魚解きけり
 芭蕉
 縣ふるはな見次郎と仰がれて
 重五
 五形菫の畠六反
 とこく
 うれしげに囀る雲雀ちりくと
 芭蕉
 眞晝の馬のねぶたがほ也
 野水
 おかぎきや矢矧の橋のながきかな
 杜國
 庄屋のまつをよみて送りぬ
 荷兮

捨し子は柴荊長 <small>タカシ</small> にのびつらん	晦日 <small>カ</small> をさむく刀賣る年	雪の狂吳の國の笠めづらしき	襟に高雄が片袖をとく	あだ人と樽を棺に吞ほさん	芥子のひとへに名をこぼす禪	三ヶ月の東は暗く鐘の聲	秋湖かすかに琴かへす者	^{名ウ} 烹る事をゆるしてはぜを放ける	聲よき念佛藪をへだつる	かげうすき行燈けしに起侘て	おもひかねつも夜るの帶引	こがれ飛たましる花のかげに入	その望の日を我もおなじく
野水	重五	荷兮	はせを	重五	杜國	芭蕉	野水	杜國	荷兮	野水	重五	荷兮	はせを

四 『冬の日』貞享元年

なには津にあし火焼家は
すゝけたれど

炭賣のおのがつまこそ黒からめ
ひとの粧ひを鏡磨寒
花藏馬骨の霜に咲かへり
鶴見るまどの月かすかなり
かぜ吹ぬ秋の日瓶に酒なき日
荻織るかさを市に振する
賀茂川や胡磨千代祭り微近み
いはくらの聲なつかしのころ

重 五
荷 兮
杜 國
野 水
芭 蕉
羽 笠
荷 兮
重 五

西南に桂のはなのつぼむとき
 羽笠
 蘭のあぶらにト木うつ音
 芭蕉
 賤の家に賢なる女見てかへる
 重五
 釣瓶に粟をあらふ日のくれ
 荷兮
 はやり来て撫子かざる正月に
 杜國
 つゞみ手向る辨慶の宮
 野水
 寅の日の且を鍛冶の急起て
 芭蕉
 雲かうばしき南京の地名ウ
 羽笠
 いがきして誰ともしらぬ人の像
 荷兮
 泥にこゝろのきよき芹の根
 重五
 粥すゝるあかつき花にかしこまり
 やすい
 狩衣の下に鎧ふ春風
 芭蕉
 北のかたなくく簾おしやりて
 羽笠
 ねられぬ夢を責るむら雨
 杜國

五

〔「冬の日」貞享元年〕

田家眺望

寂	漸	秋	酌	音	ひ	檜	冬	霜
と	く	の	と	も	き	檜	の	月
し	は	こ	と	な	ず	山	朝	や
て	れ	ろ	る	き	る	家	日	鶴
椿	で	旅	童	具	う	の	の	の
の	富	の	蘭	足	し	の	あ	イ
花	士	御	切	に	の	體	は	々
の	み	連	に	月	鹽	を	れ	な
落	ゆ	歌	い	の	こ	木	な	ら
る	る	い	と	う	ぼ	の	り	び
音	寺	と	か	す	れ	葉	け	る
		り	り	く	つ	降	り	
		に	で	と	と			
杜	荷	芭	野	羽	杜	重	芭	
國	兮	蕉	水	笠	國	五	蕉	

荷兮

茶に絲遊をそむる風の香
 雉追に烏帽子の女五三十
 庭に木曾作るこひの薄衣
 なつふかき山橋にさくら見ん
 麻かりといふ哥の集あむ
 江を近く獨樂庵と世を捨て
 我月出よ身はおぼろなる
 たび衣笛に落花を打拂
 籠輿ゆるす木瓜の山あい
 骨名を見て坐ソバに泪ぐみうちかへり
 乞食の蓑をもらふしのゝめ
 泥のうへに尾を引鯉を拾ひ得て
 御幸に進む水のみくすり
 ことにてる年の小角豆の花もろし

重五 野水 羽笠 荷兮 芭蕉 野水 羽笠 重五 芭蕉 荷兮 杜國 重五 野水

萱屋まばらに炭團つく白
 芥子あまの小坊交りに打むれて
 おるゝはすのみたてる蓮の實
 しづかさには飯臺のぞく月の前
 露をくきつね風やかなしき
 釣柿に屋根ふかれたる片庇
 豆腐つくりて母の喪に入
 元政の草の袂も破ぬべし
 伏見木幡の鐘はなをうつ
 いろふかき男猫ひとつを捨かねて
 春のしらすの雪はきをよぶ
 水干を秀句の聖わかやかに
 山茶花匂ふ笠のこがらし
 羽笠
 荷兮
 芭蕉
 重五
 杜國
 羽笠
 野水
 芭蕉
 野水
 羽笠
 重五
 杜國
 かける
 杜國
 重五
 野水
 野水
 うりつ

六

〔「冬の日」貞享元年〕

追加

いかに見よと難面うしをうつ霞
 樽火にあぶるかれはらの松
 とくさ^カ下著に髪をちやせんして
 檜笠に宮をやつす朝露
 銀に蛤かはん月は海
 ひだりに橋をすかす岐阜山

羽笠

荷兮
 重五
 杜國
 芭蕉
 埜水

七

『巖宮物語』貞享元年

尾張の國あつたにまかりける比
人く師走の海みんとて船さし
けるに

海くれて鴨の聲ほのかに白し
串に鯨をあぶる盃
二百年吾此やまに斧取て
檜のたねまく秋はきにけり
入月に鶺鴒の鳥のわたる空
駕籠なき國を露負れ行
降雨は老たる母のなみだかと

翁

桐葉
東藤
工山
葉山
翁山

一輪 咲し 芍薬の窓
 若の工夫二日とちたる目を明て
 周にかへると狐なくなり
 靈芝堀る河原はるかに暮かゝり
 花表はげたる松の入口
 笠敷て衣のやぶれ綴り居る
 あきの鳥の人喰にゆく
 一昨日の野分の濱は月澄て
 霧の雫に龍を書續く
 華曇る石の扉を押しらき
 美人のかたち拜むかげろふ
 蝦夷名の聲なき蝶と身を侘て
 生海鼠干にも袖はぬれけり
 木の間より西に御堂の壁白く

藤翁 葉藤 山翁 葉藤 山翁 葉藤 山翁 葉藤 山翁 葉藤

藪に葛屋の十ばかり見ゆ
 ほつくと爐ホウロクつくる祖父ひとり
 京に名高し瘤の呪咀
 不二の根と笠きて馬に乗ながら
 寐に行鶴のひとつ飛らん
 待暮に鏡をしのび薄粧ひ
 衣かづく小性萩の戸を推ス
 月細く土圭の響八つなりて
 棺ハツツケいそぐ消がたの露
名ワ破れたる具足を國に送りけり
 高麗のあがたに畠作りて
 紅粉染の唐紙に花の香をしぼり
 ちいさき宮の永き日の伽
 春雨の新發意粽荷ひ來て

翁藤葉 翁山藤葉 翁山藤葉 翁山藤葉 翁山藤葉

青
草
ち
ら
す
藤
の
つ
ぼ
折

藤

八
〔熱田三歌仙「貞享二年」〕

何とはなしに何やら床し董草

編笠しきて蛙聽居る

田螺わる賤の童のあたゝかに

公家に宿かす竹の中みち

月曇る雪の夜桐の下踏すげて

酒飲む姨のいかに淋しき

双六ウのうらみを文に書盡し

琴爪をしむ袖の移り香

髪下す侍従が娘おとろへて

野の宮のあらし岐王寺の鉦

芭蕉

叩端

桐葉

芭蕉

叩端

桐葉

芭蕉

叩端

桐葉

芭蕉

虚樽に色なる草をかたげ添
 叩端 桐葉
 藝者をとむる名月の關
 桐葉
 面一の遊女の秋の夜すがらや
 芭蕉
 燈風をししのぶ紅粉皿
 叩端
 川瀬行髻を角に結分て
 桐葉
 舍利とる瀧に朝日うつろふ
 芭蕉
 畏る石の御座みくらの花久し
 叩端
 羽織名に酒をかへる櫻屋
 桐葉
 歌よみて女に蠶名おくりけり
 芭蕉
 枕屏風の畫になみたぐみ
 叩端
 聞なれし笛のいろえの遠ざかり
 桐葉
 三ッ股三のふね深川の夜
 芭蕉
 菴住やひとり杜律を味ひて
 叩端
 花幽なる竹こぎの蕎麥
 桐葉

芭蕉 いかにか鳴百舌鳥は吹矢を負ながら
 叩端 水汲む小僧袖ひやゝかに
 芭蕉 月明て打板山をへだつらん
 叩端 雲は夜盜の跡埋むなり
 芭蕉 むら雨のそゝぎ捨たる馬の脊
 叩端 ひとつ兎の瓜喰ふ音
 芭蕉 笠みゆる人は葎にとぢられて
 桐葉 男やもめの老ぞかなしき
 叩端 風くらき大年の夜の七ッ聞
 芭蕉 御門をたゝく生鯉の奏
 桐葉 常盤山常盤之介が花咲て
 叩端 霞に残る連歌師の松

九

〔熱田三歌仙〕貞享二年〕

つくぐくと榎の花の袖にちる
 獨り茶をつむ藪の一家
 日影山雉子の雛をおはへ来て
 清水をすくふ馬柄杓に月
 面白き野邊に鮓賣草の上
 宿のみやげに撫子を堀る
 はな紙に都の連歌書つけて
 暮る大津に三井の鐘きく
 雪を侘ぶ漁の姥が袖を見よ
 寐に行鴨の四五百の空
 松風の饗アケに酒を飲つくし
 芭蕉 叩端 芭蕉 工山 芭蕉 叩端
 桐葉 閑水 東藤 閑水 東藤 閑水
 桐葉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

桐葉

ほとけを刻む西谷の僧
 烏羽玉の髪切ル女夢に來て
 戀をみやぶる朝貌の月
 秋は猶唯味き物喰ひけり
 白子の太夫わか霧の海
 浪よする鯨の骨に花植て
 陰干オす於コ期のかづら這ふ道
名笠持て霞に立る瘦男
 五重の塔のほとり夕暮
 鶴鶯の尾を蜘蛛の圍に懸られて
 風に身を置けふの討死
 筆とりて朴の廣葉を引撓め
 田舎祭りに物見そめたる
 うちかづく前だれの香をなつかしく
 東藤 叩端 芭蕉 工山 桐葉 東藤 叩端 芭蕉
 東藤 叩端 桐葉 叩端 桂楫 芭蕉 東藤 叩端 桂楫

たはれて君と酒買にゆく
 銀の鉢に鮎およがせて
 おほん歸京の時を占ふ
 韃鞨の東の寺の月淒く
 猿手の栗の何をまねくぞ
 名ッ 蟬鳴てまだ澁柿の秋の空
 草屋幽に馬の尾の琴
 哀なる乗物焼て歸る野に
 入日の跡の星二ツ三ツ
 宮守が油さげつも花の奥
 つゝじのふすま著たる西行
 芭蕉
 桐葉
 工山
 東藤
 芭蕉
 叩端
 東藤
 工山
 桐葉
 芭蕉
 桂楫
 芭蕉
 桐葉
 東藤
 芭蕉
 工山
 東藤
 芭蕉
 叩端
 東藤
 工山
 桐葉
 芭蕉

100 『鶴の歩』貞享三年

日の春をさすがに鶴の歩み哉
 砌に高き去年の桐の實
 雪村が柳見にくく棹さして
 酒の幌トハッに入あひひの月
 秋の山手ツカ束ツカの弓の鳥賣ん
 炭竈こねて冬のこしらへ
 里くの麥ほのかなるむら緑
 我のる駒に雨おほひせよ
 朝ウままだき三島を拜む道なれば
 念佛にくるふ僧いづくより
 あさましく連歌の興をさます覽

其角

文鱗 枳風 ヰ齋 芳重 杉風 仙化 李下 擧白 朱弦 蚊足

敵よせ來るむら松の聲
 有明の梨子打烏帽子著たりける
 うき世の露を宴の見おさめ
 にくまれし宿の木槿の散たびに
 後住む女きぬたうちく
 山深み乳をのむ猿の聲悲し
 命を甲斐の筏ともみよ
 法の土我剃り髪を埋ミ置ん
 はづかしの記をとづる草の戸
 さく日より車かぞゆる花の陰
 橋は小雨をもゆるかげろふ
 残る雪のこる案山子のめづらしく
 しづかに酔て蝶をとる歌
 殿守がねぶたがりつるあさぼらけ
 ち 擧 朱 仙 李 芳 杉 枳 コ 其 文 執 芭 ち
 り 白 弦 化 下 重 風 風 齋 角 鱗 筆 蕉 り

友よぶ蟾ツキの物うきの聲
 雨さへぞいやしかりける鄙ノボぐもり
 門は魚ほす磯イソぎはの寺
 理不盡に物くふ武者等六七騎
 あら野の牧の御ミコ召シ撰シみに
 鴟トビの一聲夕日を月にあらためて
 糺ササの飴アメ屋ヤ秋さむきなり
 電カミナリの木の間に花のこゝろばせ
 つれなきひじり野に笈カをとく
 人あまた年とり物をかつぎ行
 さかもりいさむ金山がほら
 此國の武仙ブケンを名ある繪にかゝせ
 京キョウに汲ヒする醒サ井イの水
 玉川タマガハやをのく六ムツの所みて
 芭蕉ハハヤ 齋サイ 其ソノ 角カク
 朱シュ 弦ケン 楊ヤウ 水スイ
 枳シ 風フウ 舉キョ 白ハク
 李リ 下カ 文ブン 鱗リン
 其ソノ 角カク 芳ホウ 重ジュウ
 學ガク 白ハク 仙セン 化カ
 コ 齋サイ

江 湖 〱 に 年 よ り に け り
 卯 の 花 の み な 精 シラケ に も 見 ゆ る かな
 竹 う ご か せ ば 雀 か た よ る
 南 む く 葛 屋 の 畑 の 霜 消 て
 親 と 碁 を う つ 晝 の つ れ 〱
 餅 作 る 奈 良 の 廣 葉 を 打 合 せ
 鬢 ミ に 買 る 〱 秋 の 心 は
 鹿 の 音 を 物 い は ぬ 子 も 聞 つ ら め
 に く き 男 の 斬 す む 月
 笛 の 雨 袂 七 里 を ぬ ら す 覽
 生 駒 河 内 の 冬 の 川 づ ら
ミウ 水 車 米 つ く 音 は あ ら し に て
 梅 は さ さ か り の 院 々 を 閉
 二 月 の 蓬 萊 人 も す さ め ず や
 〱 千 春 齋
 仙 化 芳 重 楊 水 不 卜 文 鱗 芭 蕉 朱 弦 不 卜 李 下 楊 水 其 角

姉待牛のおそき日の影
 胸あはぬ越の縮ちぢをおりかねて
 おもひあらはす菅の刈さし
 菱のはをしがらみふせてたかべ鳴
 木魚きこゆる山陰にしも
 囚ウツ人をやがて休むる朝月夜
 萩さし出す長がつれあひ
 問し時露と禿ハゲに名を付て
 心なからん世は蟬せみのから
 三度踏むよし野の櫻芳野山
名あるじは春か草の崩れ屋
 傾城を忘れぬきのふけふことし
 經よみ習ふ聲のうつくし
 竹深き筍折に駕かりて
 芳重 芭蕉 枳風 文鱗 李下 李下 不卜 千春 朱弦 仙化 李下 文鱗 芳重 擧白

梅まだ苦キ匂ひなりけり
 村雨に石の灯ふき消ぬ
 鮑とる夜の沖も靜に
 伊勢を乗ル月に朝日の有がたき
 釋たけなよりきて橋造る秋
 信長の治れる代や聞ゆらん
 居士とよばるゝから國の兒
 紅に牡丹千里の香を分て
 雲すむ谷に出る湯をきく
 岩ねふみ重き地藏を荷ひ捨
 笑へや三井の若法師ども
 逢名ッぬ戀よしなきやつに返哥して
 管絃をさます宵は泣るゝ
 足引の廬山に泊るさびしさよ
 コ齋
 峽水
 仙化
 不ト
 李下
 楊水
 文鱗
 千春
 峽水
 其角
 コ齋
 仙化
 芳重
 楊水

千聲となふる観音の御名
 舟いくつ涼みながらの川傳ひ
 をなごにまじる松の白鷺へ
 寢菴の七符に契る花匂へ
 連衆くはゝる春ぞ久しき

其角
 枳風
 峽水
 不ト
 舉白

一一 『詳諸一稿』貞享三年

三月廿日即興

花咲て七日鶴見る麓哉

芭蕉

懼て蛙のわたる細橋

清風

足踏木を春まだ氷る筏して

舉白

米一升をはかる關の戸

曾良

名月を隣はねたる草枕

コ齋

枝みぐるしき桐の葉を刈

其角

墨衣ふるへば蟲のから落て

清風

内外の下向しづか也けり

舉白

すでに立ッ討手の使いかめしき

曾良

一夜の契り錢かづけたる
 松明に顔みんといふ君はたそ
 生て捨子の水に流るゝ
 影形チしれぬ敵を世になげき
 ことしの餅をおもふ山寺
 雪を持櫛やさはらに露みえて
 虹のはじめは日も匂なき
 しづみては温泉を醒す月すごし
 三ツゆく鹿のひとつ矢を負ふ
 勢々^{ウイキ}と軍に氣ある朝薄
 男ながらの白粉をぬる
 膝琴に明^シの風雅を忘れざる
 涙おりく牡丹ちりつゝ
 耳うとく妹が告たる時鳥

芭蕉
 其角
 清風
 曾良
 コ齋
 學白
 キ角
 はせを
 コ齋
 嵐雪
 清風
 キ角
 學白
 芭蕉

つれなき美濃に茶屋をしてゐる
 札焼て刀ばかりは傳えけり
 我カうつ鷹を殿の御拳
 檜紅葉狂歌やさしくよみそへて
 京の月夜はさぞ躍らん
 物となくものやむ人の獨寢に
 眉ぬく袖の翠簾にうつぶき
 からのふみよめぬ所をうちやりて
 ひともじ買に雪の山道
 哀さは笹屋に捨し破れ網
 何やらなくて鹽やかぬ浦
 相國の植たまひけん花と松
 車を下りて春のやすらひ

曾良
 清風
 キ角
 コ齋
 嵐雪
 學白
 芭蕉
 曾良
 コ齋
 清風
 芭蕉
 キ角
 學白

一一一 『三日月日記』貞享四年？』

納涼の折くいひ捨たる和漢
月の前にしてみたしむ

破風口に日影やよはる夕涼

芭蕉

素堂

煮^レ茶^ヲ 蠅^ヲ 避^レ烟^ヲ
合^ハ歡^ニ 醒^ユ馬^ニ 上^ニ

同

かさなる小田の水落す也

蕉

月^ハ代^シ 見^ル金^ハ氣^ニ
露^ハ繁^ク 添^フ玉^ニ 涎^ニ

同

張旭が物書なぐる酔の中
幢^{トバツ}を左右にわくる村竹

同

箕 面 の 瀧 や 玉 を 簸 ら ん
 籐 を 杖 つ く 老 の 鶯
 花 月 丈 一 山 閑
 韻^ハ 使^シ 五 車^ニ 塙^{イノスエト}
 託^ハ 教^ニ 三 社^ニ 本^{ナラ}
 食 は す け ぬ 蚊 遣 火 の かげ
 顔 ば かり 早 苗 の 泥 に よ ご さ れ ず
 鐘^ハ 絶^レ 日 一 高 川
 舟^ハ 鉤^{コル} 風 一 早 浦
 乳 を の む 膝 に 何 を 夢 見 る
 く ろ か ら ぬ 首 か き た る 柘 の 撥
 ふ る き 都 に 残 る お 魂 屋
 挈^テ 帚^ニ 驅^ム 偷^ニ 鼠^ニ

蕉 堂 蕉 同 同 堂 同 蕉 同 堂 同 同 蕉 堂

朝日影頭の鉦をかゞやかし

風フ 喉ノド 早ハヤ 乾カハク

よられつる委の葉あつく秋立て

内は火とぼす庭の夕月

霧キリ 離リ 顔カノ 執ツク 與ヨ

霰シラフネ 浦ウラ 日ヒ 潛ナシククム 焉ヤ

ふとん著て其夜に似たる鳥の聲

わすれぬ旅の數珠と脇指

山ヤマ 伏フス 山ヤマ 平ヒラ 地チ

門カド 番バン 門カド 小コ 天テン

鶴ツル 鷓セウ 窺ノゾク 水ミヅ 鉢ハチ

霜にくもりて明る雲やけ

奥ふかき初瀬の舞臺に花を見て

臨ミ 谷ヤ 伴トナリ 蛙カエル 仙セン

蕉堂 蕉堂 同 蕉堂 蕉堂 蕉堂 蕉堂 同 蕉堂

一三 『續みなし栗』貞享四年

十月十一日餞別會

旅人と我名よばれん初霽
 亦さゝん花を宿くにして
 鷓鴣カキの心ほど世のたのしきに
 糧を分たる山陰の鶴
 かけありく芝生の露の淺綠
 新シ舞臺月にまはばや
 中の秋畫エ工カキ一つれかへるなり
 鱸ウてうじておくる漢舟
 神垣や次第にひくき波のひま

芭蕉

由之
 其角
 枳風
 文鱗
 仙化
 魚兒
 觀水
 全峰

齡とをしれ君が若松
 酒のみにさをとめ達の並居て
 卯月の雪を握るつくばね
 鰯イサナつる袖つくばかり早瀬川
 蘿一面にのこる橋杭
 道しらぬ里に砧をかりに行
 月にや啼ん泊瀬の籠コモリ人
 葛籠ツバとく匂ひも都なつかしく
 おもはぬ事を諷ふ傀儡
 途中にたてる車の簾スを巻て
 沖こぐ舟にめされしは誰タレ
 花ゆへに名の付波ぞめづらしき
 別る雁雁をかへす琴の手
 名
 順の峯しばしりき世の外に入
 観
 水
 嵐雪
 由之
 翁
 全峰
 仙化
 文鱗
 枳風
 其角
 由之
 翁
 執筆
 嵐雪

萱のぬけめの雪を焼家
 老の身の繩なふ程にほそりける
 君流されし跡の關守
 明暮は干潟の松をかぞへつゝ
 命をおもへ船に這蟹
 起出て手水つかはん海のはた
 しらぬ御寺を頼む有明
 薺や石ふむ坂の日にしほれ
 小畑さびしき案山子作らん
 草の戸の馬を酒債におさへられ
 つねみる星を妹におしゆる
 薫のしめり面白き夕涼み
 幟かざして氏の天王
 御牧野の笛吹習ふ童聲

仙化
 由之
 翁白
 學白
 仙化
 其角
 全峯
 嵐雪
 キ角
 學白
 觀水
 全峰
 枳風
 翁白
 學白
 仙化
 其角
 全峯

僧くるはしく腰にさす杖
 見ぐるしと文字の子昂アサケ唄アサケて
 堺の錦蜀をあらへる
 隠家や寄カ虫ウツの友に交りなん
 筏に出て海苔すくふ比
 谷深き日うらは花の木目のみ
 聲しだれたる春の山鳥
 枳風
 其角
 嵐雪
 觀水
 翁
 舉白
 由之

一四 『千鳥掛』貞享四年

星崎の闇を見よとや啼千鳥
 船調ふる海士の埋火
 築山のなだれに梅を植かけて
 あそぶ子猫の春に逢つゝ
 鶯の聲夜を待月のほのか也
 岡のこなたの野邊青き風
 一里の雲母ながるゝ川上に
 祠さだめて門ぞはびこる
 市に出てしばし心を師走かな
 牛にれかみて寒さわするゝ
 靱白の音聞ながら我いびき

芭蕉

安 信
 自 笑
 知 足
 美 言
 如 風
 重 辰
 言 辰
 足 言
 信 言
 風 言

月をほしたる螺の酒
 高紐に甲をかけて秋の風
 渡り初する宇治の橋守
 庵造る西行谷のあはれとへ
 啄木鳥たゞく杉の古枝
 咲花に晝食の時を忘れけり
 山も霞むとまではつゞけし
 名
 辛螺からの油ながるゝ薄氷
 角ある眉に化粧する霜
 待宵の文を喰さく帳の内
 寝られぬ夢に枕あつかひ
 罪なくて配所にうたひ慰まん
 庶子にゆづりし家のつり物
 式日の日はかたぶきてこゝろせく

蕉笑風足信風言蕉風足辰信足風笑蕉

あ さ く さ 米 の 出 る 川 口
 欄 干 に 頤 な ら ぶ 夕 涼
 笠 持 テ あ ふ つ 螢 火 の 影
 初 月 に 外 里 の 姫 の 新 通 ひ
 薄 は ま ね く 荆 袖 引
名ッ
 朝 霧 に つ ら き は 鴻 の 背 な ら ず
 あ か ど ね が は ら な め ら か に し て
 氏 人 の 庄 藪 多 キ 花 ざ か り
 駕 籠 幾 む れ の 春 と ま ら ず
 田 を 返 す あ た り に 山 の 名 を 問 て
 か す み の 外 に 鐘 を か ぞ ふ る

執

辰 蕉 足 笑 蕉 辰 笑 言 風 信 筆

一五

〔千鳥掛〕貞享四年〕

京まではまたなかぞらや雪の雲
 千鳥しばらく此海の月
 小蛤ふめどたまらず袖ひぢて
 酒氣さむればうらなしの風
 引捨し琵琶の囊を打はらひ
 僕はおくれて牛いそぐ也
 ふたつみつ反哺の鴉鳴つる
 明日の命の飯けぶりたつ
 わたり舟夜も明がたに山みえて
 鐘いくところにしかひがしか
 其すがた別の後も一わらひ

芭蕉

美言
 知足
 如風
 安信
 自笑
 重辰
 信
 笑
 蕉
 足

なみだをそへて鄙の腰折
 髪けづる熊の油の名もつらく
 身に瘡出て秋は寝苦し
 釣簾の外にたばこをたゝむ月の前
 楊枝ずまふのちからあらそひ
 小袖して花の風をもいとふべし
 名
 こがるゝ猫の子を捨て行
 うき年を取てはたちも漸過ぬ
 父のいくさを起ふしの夢
 松陰にすこし草ある波の聲
 翅をふるふ鳩ひとつがひ
 しづかなる龜は朝日を戴きて
 三度ほしたる勅のかはらけ
 山守が車にけづる木をになひ

言蕉風信足辰信足蕉言
 言蕉風信足辰信足蕉言

燧 ならして 岩を 打かく
 瀧 津瀬に 行ふ 法の 朝嵐
 狐 かくるゝ 蔦の くさむら
 殿 やれて 月は むかしの 影ながら
 老 かむう ばが ころも 打音
名ウ
 ふ すぶりし 櫓の 煙の しらけたる
 陳 の かり 屋に 碁を 作る 程
 山 更によこ おりふ せる 雨の 脚
 氣 を たす けなん ほとゝぎす 鳴ヶ
 花 盛文を あつむ る 窓 閉て
 御 燈かゝ ぐる 神 垣の 梅

足 風 笑 言 蕉 辰 信 風 足 言 筆

一六

『如行子』貞享四年

ためつけて雪見にまかる紙衣哉
 むている土に拾はれぬ塵
 松風に睡る日向のすくなくて
 鶴白鳥の下りておもしろ
 水浅く舟押ほどの秋の暮
 もう山の端に月の一ひろ
 きぬぐや烏帽子置床忘れけり
 眉ほそむるも恥るうかれ女
 寄手等はいつともなげに歌よみて
 干飯の水のつめたきもよし
 著て來たる布子苦になる晝の比

はせを

昌碧 龜洞 荷兮 野水 聽雪 越人 舟泉 執筆 碧洞

なみだうつりて能は覺へず
 門跡の顔見る人はなかりけり
 笈に雨もる峰の稻妻
 よいほどに寝てから後の礎きく
 夜の明やと膽つぶす月
 うかくと律義に花のまたれつる
 雌ともしらで飼るうぐひす
 名
 尼寺に春雨つゞくしとくと
 釣瓶なければ水にとぎれて
 夕顔の軒にとりつく久しさよ
 布杭二本よるは淋しき
 隙くれし妹をあつかふ人も來ず
 食燒事を倦て泣けり
 旅立の心はむさきものなれや

水兮蕉雪人泉洞碧雪人兮蕉碧泉

けふ髪剃に鴨川の水
 蟬の音に單の衣も身に付ず
 細きかひなの枕いたげに
 月しのぶ紙燭をけしてすべり入
 もの著て君をおどす秋風
名ッ
 此橋を好でかへる霧の中
 山引出して乗初る駒
 しでかけて雁股つがふ弓ふとく
 狩ころびてよりひまころびけり
 何かたも花に成たる花の陰
 藪の中にも椿山吹

水洞人兮蕉泉雪洞人水雪

一七

『芭蕉翁俳諧集』元祿元年

何の木の花とも知らず白ひ哉
 こゑに朝日を含むうぐひす
 春深き柴の橋もり雪掃て
 二葉のすみれ御幸まちけり
 有明の草紙を絹に引つゝみ
 寢覺はながき夜のあぶら火
 釣梯ウに鼠のかよふ音聞て
 門細めなる田の中の寺
 山路来て清水まれなる袖の汗
 わづらふ鷹をたのむ悲しさ
 女のみ古き御館の破すだれ

芭蕉

益光
 又玄
 雲庵
 勝延
 清里
 光
 蕉
 庵
 玄
 蕉

碁に肘つきて、泪落しつ
 いねがねに酒さへならず物思ひ
 陳のかり屋に僧のこもりて
 しら雲にのぼれと雁を放つらし
 はじめて得たる國のはつ稻
 漏月を賤がはた織る窓にみて
 藍にしみつく指かくすらん
 名
 神役にやとはれきぬる注連の内
 返歌につまるきねの佛
 こひ草と池のあやめを折かねて
 水鶏を止に起し曉
 多葉粉すふ篝の跡のけぶりたる
 誰が乗物に霜かゝるまで
 あくがるゝ樂の一手を聴とりて

蕉 里 庵 玄 延 人 光 蕉 玄 庵 里 光 人 延

釣の王子の浦はさびけり
 聲立て華表に残る秋の蟬
 しぐるゝ風に銀杏吹ちる
 笈かけて夜毎の月を見ありきし
 心とすさむ家の岡もきえ
 親名ッひとり茶によき水と歎つる
 まづ初瓜を米に代なす
 此坊を郭公きくやどりにて
 ゆりこむ櫂に舟繋ぎけり
 ものゝふの弓弦に花を引撓め
 短冊のこす神垣の春

正

光 玄 延 人 庵 光 蕉 永 玄 延 人

一八

〔秋の日〕元祿元年作

貞享五戊辰七月廿日

於竹葉軒長虹興行

粟稗にとぼしくもあらず草の菴

藪の中より見ゆる青柿

秋の雨歩行鶴に出る暮かけて

月なき岨をまがる山あい

ひだるしと人の申ばひだるさよ

藁もちよりて屋根葺にけり

木の葉ちる榎の末も神無月

つて待かぬる島のくひ物

芭蕉

長虹

荷兮

一井

越人

胡及

鼠彈

蕉

庭著て蚊の啼聲に睡られず
 われに狂ふや妾がおとろへ
 水つけず立たる髪の冷じく
 死で間もなき玉まつるなり
 石籠もあらはれ出る夜の月
 簀をくむとて寐ぬわたし守
 火ぶりして歸るおのこは何者ぞ
 白きたもとの見ゆる興かき
 雨乞にすはく華のうるおひて
 竹名ゆひそゆる軒の連翹
 日和名さよけふは氣あいの少しよく
 木馬なほして子ものせにけり
 色黒き下部つまげてかしこまり
 切籠おりかけすぎき夕ぐれ

虹兮井及彈井 蕉兮井及彈井 人井兮井及彈井

さまぐの香かほりけり月の影
 人一代の戀をとふ秋
 捨し世はくずのうらみも引むしり
 きたなくなれどかほも洗はず
 懐に脇指さしてまた出る
 下戸をにくめる雪の夜の亭
 早咲のむめをわが身にたとへたり
 嫁せぬむすめの眉かゝでおる
名ッ
 しのび音にすがゞきならず垣の奥
 ふみきやささせる松のともし火
 明やすき夜をますら〔を〕が腹立て
 なにを啼行ほとゝぎすやら
 花によるすどりのふたに物かきぬ
 簾はり出すはるの夕ぐれ

人蕉虹 及兮蕉彈 及兮蕉彈 及兮蕉彈 及兮蕉彈 及兮蕉彈 及兮蕉彈 及兮蕉彈

一九

〔嘯野〕元禄元年

深川の夜

雁がねもしづかに聞ばからびずや	越人
酒しるなならふこの比の月	芭蕉
藤ばかま誰窮窟にめでつらん	同人
理をはなれたる秋の夕ぐれ	越人
瓢箪の大きき五石ばかり也	同人
風にふかれて歸る市人	芭蕉
なに事も長安は是名利の地	同人
醫のおほきこそ目ぐるほしけれ	越人
いそがしと師走の空に立出て	芭蕉

ひとり世話やく寺の跡とり
 越人
 此里に古き玄蕃の名をつたへ
 芭蕉
 足駄はかせぬ雨のあけぼの
 越人
 きぬぐやあまりかほそくあてやかに
 芭蕉
 かぜひきたまふ聲のうつくし
 越人
 手もつかず晝の御膳もすべりきぬ
 芭蕉
 物いそくさき舟路なりけり
 越人
 月と花比良の高ねを北にして
 芭蕉
 雲雀さえづるころの肌ぬぎ
 越人
 破れ戸の釘うち付る春の末
 同
 みせはさびしき麥のひきはり
 芭蕉
 家なくて服裳につむ十寸鏡
 人
 ものおもひある神子のものいひ
 蕉人
 人去ていまだ御坐の匂ひける
 人

初瀬に籠る堂の片隅
 ほととぎす鼠のあると最中に
 垣穂のさゝげ露はこぼれて
 あやにくに煩ふ妹が夕ながめ
 ああ雲はたがなみだつゝむぞ
 行月のうはの空にて消さうに
 砧も遠く鞍にいねぶり
 秋名ウの田をからせぬ公事の長びきて
 さいくながら文字問にくる
 いかめしく瓦庇の木薬屋
 馳走する子の瘦てかひなき
 花の比談義参もうらやまし
 田にしをくふて腥きくち

蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉人蕉

110 『ゆきまるけ』元祿二年

元祿二仲春

嗒山旅店にて

かげろふの我肩にたつかみこかな
 水やはらかにほしり行おと
 柚のやにうどのあへものあつらへて
 身はかりそめにさるのこしかけ
 いざよひもおなじ名所に歸りけり
 こゝろをかくすものうりの秋
 萩^ウはらは露にぬれてもおもしろき
 ふとふり拂ふとものだいまつ

はせを

會良
 嗒山
 此筋
 會良
 はせを
 此筋
 嗒山

五月まで小そでのわたもぬきあへず
 おちたるかみをときそろへつゝ
 こひられてこふ人よりも物ぐるし
 ほそく書たるふみのやさしき
 さかづきをそこらにこたつとりまぎて
 としよりひとり日まちつとむる
 ものゝ音もなつは夏をぞふきにける
 きりのたうたつ其かげの家
 たびぐるまあくるひがしは月と花
 なみはかすみのふじをうごかす
^名客よびてしほひながらのいかなます
 いぬにをはるゝあぢのむらとり
 城北のはつゆきはるゝみのぬぎて
 おきて火をふくかねつきが妻

はせを
 曾良
 嗒山
 此筋
 曾良
 芭蕉
 嵐蘭
 嗒山
 曾良
 嵐蘭
 曾良
 芭蕉
 曾良
 嗒山
 芭蕉
 芭蕉

行歸りまよひ子よばるほし月夜
 組でこかせば鹿驚なりけり
 やまかせにきびしく落る栗のいが
 黒木ふすべるたにかげの小屋
 たがよめと身をやまかせんものおもひ
 あら野のゆりになみだかけつゝ
 おほかみの番してあくるなつの月
 みつのいはやに佛つくりて
名ウ
 むぎゑます諏訪のいでゆのにえかへり
 たびね侘たる關のうちもの
 何ゆへに人のじうさと身をさげて
 ぜんにすはれば鯛のはまやき
 一門のはなみ衣のさまぐに
 つたはるふぢの筋のどかなり

嵐 嵐 芭 北 曾 嗒 嵐
 竹 蘭 蕉 鯉 良 山 蘭

二二
 『陸奥衛』元祿二年』

陸奥にくだらむとして下野國ま
 で旅立けるに那須の黒羽と云所
 に翠桃何某の住けるを尋て深き
 野を分入る程道もまがふばかり
 に草ふかければ

秣負ふ人を枝折の夏野哉
 青き覆盆子をこぼす椎の葉
 村雨に市の假屋を吹とりて
 町の中行川音の月
 鷹の子を手に居ながらきりぐす

芭蕉

翠桃
 會良
 芭蕉
 翠桃

萩の墨繪の縮緬は誰
 物いへば小笠に顔を押入るゝ
 みだれた髪のつらき乗合
 尋ぬるに火を焼付る家もなし
 盗人こわき二十六の里
 松のねに笈を雙て年とらん
 雪になるから連歌はじむる
 鹿相にておかしき小野の炭俵
 碓りたるゝ尼達の菴
 あの月も戀故にこそ悲しけれ
 露とも消ね胸の痛きに
 錦繡に時めく花の憎かりし
 己が羽に乗蝶の小車
 日傘さす子どもすかして春の庭
 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良
 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良
 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良 芭蕉 曾良

嚙
ず
に
吞
と
投
丸
藥
花
の
宿
馳
走
を
せ
ぬ
が
馳
走
也
ふ
さ
ぐ
と
い
ふ
て
火
燧
其
ま
ゝ

翠
桃
桃
里
翅
輪

二二二
 『信夫摺』元祿二年

みちのくの名所く心におもひ
 こめてまづ關屋の跡なつかしき
 まゝにふるみちにかゝりていま
 の白河も越えぬ頼ていはせの郡
 にいたりて乍單齋等躬子の芳扉
 を扣彼陽關を出て故人に逢なる
 べし

風流のはじめや奥の田植哥
 覆盆を折て我まうけ草
 水せきて晝寢の石やなをすらん

芭蕉

等躬
 曾良

籬ヒヅに 鮎アヲの 聲コエい か す な り
 一葉して月に益なき川柳
 雇ヨウに 屋根ヤふく村ぞ秋なる
 賤ウの女が上總念佛に茶を汲て
 世をたのしやと涼む數もの
 有時は蟬にもユメの入ぬらむ
 樟カエデの 小えだに戀コイを隔てゝ
 うらみては嫁が島の名もにくし
 霜降フユ山や白髪おもかげ
 酒盛は軍を送る關に來て
 秋をしる身と物讀し僧
 更る夜の壁突破る鹿の角
 島の御伽の泣伏る月
 色イロくの祈イノチを華ハナにこもりゐて

蕉 躬 良 蕉 躬 良 蕉 躬 良 蕉 躬 良 蕉 躬 良 蕉 躬

名
 悲しきほねをつなぐ絲ゆふ
 やま鳥の尾にをく年やむすぶらん
 芹堀計清水つめたき
 薪木引雪舟一筋の跡有て
 をのく武士の冬ごもる宿
 筆とらぬ物ゆへ戀の世にあはず
 宮にめされし憂名恥かし
 手枕にほそき肱をさし入て
 何やら事の足らぬ七夕
 住かへる宿の柱の月を見よ
 薄赤らむ六條が髪
 剪櫛枝うるさゝに撰残し
 太山つぐみの聲ぞしぐるゝ
 名
 淋しさや湯守も寒く成まゝに

良蕉 躬蕉 良蕉 躬蕉 良蕉 躬蕉 良蕉 躬蕉 良蕉 躬蕉

殺生石の下はしる水
華遠き馬に遊行を道引て
酒のまよひの醒る春風
六十の後こそ人の陸月なれ
蠶飼する家に小袖かさぬる

良躬蕉良躬

二三 〔伊達衣〕元禄二年

桑門可伸は栗の木のもとに庵を
 むすべり傳へ聞行基菩薩の古は
 西に縁有木なりと杖にも柱にも
 用ひ給ひけるとかや幽棲心ある
 分野にて彌陀の誓ひもいとたの
 もし

かくれ家や目だゝぬ花を軒の栗
 まれに螢のとまる露草
 切崩す山の井の名は有ふれて
 畔づたひする石の棚橋

芭蕉

栗 齋
 等 躬
 會 良

把ねたる眞柴に月の暮かゝり
 秋しり貌の矮屋はなれず
 梓弓矢の羽の露をかはかせて
 願書をよめる曉の聲
 松齒朶に吹よはりたる年の暮
 酒の遺恨をいふ心なし
 聳入は誰に聞ても恥しき
 ざれて送れる傾城の文
 貧しさを神にうらむるつたなさよ
 月のひづみを心より見る
 獨して沙魚釣兼し高瀬守
 笠の端をすする蘆のうら枯
 梅に出て初瀬や芳野は花の時
 かすめる谷に鉦鼓折く
 等雲 須竿 素蘭 等雲 曾良 等躬 栗齋 芭蕉 素蘭 須竿 等雲
 曾良 芭蕉 栗齋 等躬 素蘭 須竿 等雲 曾良 等躬 栗齋 芭蕉

あるほどに春をしらする鳥の聲名
 水ゆるされぬ黒髪ぞうき
 等 躬
 須 竿
 芭 蕉
 須 竿
 轉寐の夢さへうとき御所の中
 等 雲
 須 竿
 朴をかたる市の酒酔
 等 雲
 須 竿
 行僧に三社の託を戴きて
 等 雲
 須 竿
 乗合まてば明六の鐘
 素 蘭
 等 躬
 伽になる嶋鴨の餌を慕ひ
 等 躬
 栗 齋
 四 五 日 月 を 見 たる 蚤 の 屋
 等 雲
 徒にのみかひなき里のむら桧
 等 雲
 鹿の音絶て祭せぬ宮
 等 雲
 會 良
名冠をも落すばかりに泣しほれ
 等 躬
 芭 蕉
 等 躬
 う っ か り つ ぐ く 文 を 忘 る

戀すれば世にうとまれてにくい頬
氣もせきせはし忍夜の道
栗齋
入口は四門に法の花の山
曾良
つばめをとむる蓬生の垣
等雲

二四

『ゆるまるけ』元祿二年

大石田高野平右衛門亭にて

五月雨を集て涼し最上川
 岸にほたるをつなぐ舟杭
 瓜島いざよふ空に月待て
 里をむかひに桑の細道
 牛の子に心なぐさむ夕間暮
 水雲重しふところの吟
 侘笠を枕にたてゝ山嵐
 松むすびをく國の境め
 永樂の古き寺領をいたゞきて

はせを

一榮
 會良
 川水
 一榮
 芭蕉
 川水
 會良
 はせを

集に遊女の名をとむる月
 芭蕉
 鹿笛にもらふもおかしぬり足駄
 一榮
 柴賣に出て家路忘るゝ
 川水
 ねむた咲木陰を晝のかげろいに
 芭蕉
 たへくならず萬日のかね
 曾良
 古里の友かと跡をふりかへし
 川水
 ことば論する船の乗合
 一榮
 雪名ウみぞれ師走の市の名残とて
 曾良
 煤掃の日を艸庵の客
 芭蕉
 なき人をふるき懷紙にかぞへられ
 一榮
 やもめがらすの迷ふ入逢
 川水
 平包翌は越へき峰の花
 芭蕉
 山田の種をいはふ村雨
 曾良

二五

〔ゆきまるけ〕元禄二年

六月十日

七日羽黒に参籠して

めづらしや山をいで羽の初茄子

芭蕉

蟬に車の音添る井戸

重行

紺機の暮鬧しう梭打て

曾良

閏彌生もすゑの三ヶ月

露丸

吾顔に散かゝりたる梨の花

重行

銘をこてふと付しさかづき

芭蕉

山端ウのきえかへり行帆かけ船

露丸

藝無里は心とまらず

曾良

遙けさは目を泣腫すつくし船 露丸
 所々に友をうたせて 曾良
 千日の庵を結ぶ小松原 重行
 蝸牛のからを踏つぶす音 露丸
 身は蟻のあなうと夢や覺すらん 芭蕉
 こけて露けきをみなへし花 重行
 明はつる月を行脚の空に見て 曾良
 温泉かぞふる陸奥の秋風 芭蕉
 初雁名ッの比よりおもふ氷様 露丸
 山殺ソキ作る宮のふきかへ 曾良
 尼衣男にまさるこゝろにて 重行
 行かよふべき哥のつぎ橋 露丸
 花のとき啼とやらいふ呼子鳥 芭蕉
 艶に曇りし春の山彦 曾良

二六

『蕉尾集』元禄二年

江上之晚望

あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ
 海松かる磯にたゞむ帆むしろ
 月出ば關屋をからん酒持て
 土もの籠のけぶる秋風
 しるしゝてほりに遣たる色柏
 あられの玉をふるふ簑の毛
 鳥屋籠る鶉飼の宿に冬の來て
 火をたくかげに白髪たれつゝ
 海道は道もなきまで切せばめ

不 曾
 芭蕉
 風籬翁

良 玉 蕉 良 玉 蕉 良 玉 蕉

松笠をくる武隈タケノの土産
 草枕おかしき戀もしならひて
 岐の神に申かねごと
 お供して當なき我も忍らん
 この世の末もみよし野に入る
 朝づとめ妻帶寺のかねの聲
 けふもいのちと島の乞食
 かじけたる花し散なと茱萸折て
 隴名の鳩の寐どころの月
 物いへば木魂にひよく春の風
 すがたは瀧にきゆる山姫
 剛力がけつまづきたる笹傳ひ
 棺をおさむる塚の荒芝
 初霜はよしなき岩を粧ふらん

蕉玉良玉蕉良玉蕉良玉蕉良玉蕉良玉蕉

ゑびすの衣を縫くぞ泣
 明日しめん雁を俵に生置て
 月さへすごき陳中の市
 御輿は眞葛が奥にかくしいれ
 小袖袴ををくる戒の師
 我かほの母に似たるもゆかしくて
 貧にはめらぬ家はうれども
 名^ウ奈良の京持傳たる古今集
 はなに符をきる坊の酒藏
 鶯の巢を立初る羽づかひ
 蠶種うごきて箒手にとる
 錦木をつくりてふるき戀をみん
 ことなる色をこのむ宮達

良翁玉良蕉玉良蕉玉良蕉玉良蕉玉良

二七

『卯辰集』元祿二年

元祿二の秋翁をおくりて
山中温泉に遊ぶ三兩吟

馬かりて燕追行わかれかな

花野みだるゝ山の曲め

月よしと相撲に袴踏ぬぎて

靴ぼしりしをやがてとめけり

青淵に瀬の飛込水の音

柴かりここかす峯の笹道

霰降左の山は菅の寺

遊女四五人田舎わたらひ

北枝

曾良

翁

北枝

曾良

翁

北枝

曾良

う	手	銀	長	春	花	白	秋	露	有	先	蓮	髪	落
つ	枕	の	閑	を	の	き	風	ま	明	祖	の	は	書
く	にし	小	さ	残	香	た	は	づ	の	の	絲	そ	に
し	と	鍋	やし	せ	は	も	物	拂	祭	貧	と	ら	戀
か	ね	に	ら	る	古	と	いは	ふ	の	をつ	る	ね	し
れ	の	出	難	支	き	の	ぬ	獵	上	た	も	ど	き
と	ほ	す	波	仍	都	續	子	の	座	た	中	魚	君
の	こ	芹	の	の	の	く	も	弓	か	へ	く	く	が
ぞ	り	焼	具	箱	町	葬	涙	竹	た	た	罪	は	名
く	打		づく		作	禮	に		く	へ	ふ	ぬ	も
覆	拂		し		り		て		な	た	か	也	有
面									し	る	き	有	て
									門	門			
北	翁	曾	北	翁	曾	北	翁	曾	北	翁	曾	北	翁
枝	良	良	枝	良	良	枝	良	良	枝	良	良	枝	翁

醉	鐘	寺	仲	あ	細	雨	疱	小	初	あ	鳴	非	つ
狂	つ	に	綱	か	長	晴	瘡	畑	發	は	ふ	藏	ぎ
人	い	使	が	ね	き	く	は	も	心	れ	た	人	小
と	て	を	宇	を	仙	も	桑	近	草	に	つ	な	袖
彌	遊	立	治	し	女	り	名	し	の	作	臺	る	薰
生	ん	る	の	ぼ	の	枇	日	伊	枕	る	に	ひ	賣
暮	花	口	網	る	姿	杷	長	勢	に	三	す	と	の
行	の	上	代	水	た	つ	も	の	修	ヶ	へ	の	古
	ち		と	の	を	は	は	神	業	月	も	菊	風
	り		打	白	や	る	や	風	し	の	淋	畑	な
	か		詠	波	か	也	り	過	さ	脇	し	同	り
	ゝ				に		過		よ		さ	翁	
	る										よ		
筆	翁	同	北	同	翁	同	北	同	翁	同	北	同	翁
			枝				枝				枝		

二八

〔巳ヶ光〕元祿三年

午年伊賀の山中

春興

種芋や花のさかりに賣ありく
 こたつふさげば風かはる也
 酒好のかしらも結ず春暮て
 ぬぎかへがたき革の衣手
 有明の七つ起なる薬院に
 ひさごの札を付わたしけり
 秋風ウに槇の戸こぢる膝入れて
 小僧のくせに口ごたへする

半残 土芳 良品 半残 翁品 芳

翁

やすくと矢洲の河原のかち渉り
 多賀の杓子もいつのことぶき
 手枕のおとも持たで三つ輪組
 人にとりつく憂名くちおし
 萱草の色もかはらぬ戀をして
 秋たつ蟬の啼しにけり
 月暮て石屋根まくる風の音
 こぼれて青き藍瓶の露
 薺の花の手際に咲そめて
 細や鳴來る水のかはりめ
 猫名の目の六つ柿核に四つ圓く
 あすのもよひの織蘿蔔きる
 からうすも病人あればかさぬ也
 たゞさゝやいて出る髪ゆひ

翁 残 品 芳 残 翁 芳 品 翁 残 品 芳 残 翁

とりぐに紺屋の形を取散し
 冬至の縁に物おもひます
 けはへどもよそへども君かへりみず
 まだ元服のあどなかりける
 朝夕にきらひの多き膳まはり
 いとあはれなる野の宮の衆
 田鼠の稻はみあらす月澄て
 風ひえそむる牛の子の旅
 露名しぐれ越のさきおり袖もなし
 しなずは人の何に成べき
 神風や吹起されてかい覺ぬ
 筆をおとせば (三字不明) □ □ 出す
 しらくとひとへの花に指むかひ
 長閑き晝の太鼓うちけり

品 芳 殘 翁 芳 品 翁 殘 品 芳 殘 翁 芳 品

二九

『ひさご』元祿三年

花見

木のもとに汗も鱈も櫻かな
 西日のどかによき天氣なり
 旅人の風かき行春暮て
 はきも習はぬ太刀の鞆ヒツハタ
 月待て假の内裏の司召
 鞆ウ白つくる杣がはやわざ
 鞍置る三歳駒に秋の來て
 名はさまくに降替る雨
 入込に諏訪の涌湯の夕ま暮

翁

曲 珍

水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁 水 碩 翁

中にもせいの高き山伏
 いふ事を唯一方え落しけり
 ほそき筋より戀つのりつゝ
 物おもふ身にも喰へとせつかれて
 月見る顔の袖おもき露
 秋風の船をこはがる波の音
 鴈ゆくかたや白子若松
 千部讀花の盛の一身田
 順禮死ぬる道のかげろふ
名
 何よりも蝶の現ぞあはれなる
 文書ほどの力さへなき
 羅に日をいとはるゝ御かたち
 熊野みたきと泣給ひけり
 手束弓紀の關守が顔に

翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水 翁 碩 水

酒ではげたるあたま成覽
 双六の目をのぞくまで暮かゝり
 假の持佛にむかふ念佛
 中く^レに土間に居れば蚤もなし
 我名は里のなぶりもの也
 憎まれていらぬ躍の肝を煎
 月夜く^レに明渡る月
 花薄^{名ウ}あまりまねけばうら枯て
 唯四方なる草庵の露
 一貫の錢むづかしと返しけり
 醫者のくすり^ハ飲ぬ分別
 花咲けば芳野あたりを欠廻
 蛇にさゝるゝ春の山中

水翁碩 水翁碩 水翁碩 水翁碩 水翁碩 水翁碩 水翁碩 水翁碩

三〇 『蕉鏡』元祿三年

市中は物のにほひや夏の月
 あつしくと門くの聲
 芭蕉
 去
 二番草取りも果さず穂に出て
 灰うちたまくうるめ一枚
 芭蕉
 去
 此筋は銀も見しらず不自由さよ
 たゞどびやうしに長き脇指
 芭蕉
 来
 草村に蛙こはがる夕まぐれ
 露の芽とりに行燈ゆりけす
 芭蕉
 来
 道心のおこりは花のつぼむ時
 能登の七尾の冬は住うき
 芭蕉
 来
 魚の骨しはぶる迄の老を見て
 凡
 光

待人入し小御門の鎔
 立かゝり屏風を倒す女子共
 湯殿は竹の簀子侘しき
 苗香の實を吹落す夕嵐
 僧やゝさむく寺にかへるか
 さる引の猿と世を經る秋の月
 年に一斗の地子はかる也
 五六名本生木つけたるミツクマ漕
 足袋ふみよごす黒ぼこの道
 追たてゝ早き御馬の刀持
 でつちが荷ふ水こぼしたり
 戸障子もむしろがこひの賣屋敷
 てんじやうまもりいつか色づく
 こそくと草鞋を作る月夜さし

兆來蕉兆來蕉兆來蕉兆來蕉兆來蕉兆來

蚤をふるひに起し初秋
 そのまゝにころび落たる升落
 ゆがみて蓋のあはぬ半襦
 草庵に暫く居ては打やぶり
 いのち嬉しき撰集のさた
名ウ
 さまぐに品かはりたる戀をして
 浮世の果は皆小町なり
 なに故ぞ粥すゝるにも涙ぐみ
 御留主となれば廣き板敷
 手のひらに虱這はする花のかけ
 かすみうごかぬ晝のねむたさ

蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉 兆 來 蕉

三二 『巖鏡』元禄三年

灰汁桶の雫やみけりきりぐす
 あぶらかすりて宵寢する秋
 新疊敷ならしたる月かげに
 ならべてうれし十のさかづき
 千代經べき物を様く子日して
 鶯の音にたびら雪降る
 乗^ウ出して肱に餘る春の駒
 摩耶が高根に雲のかゝれる
 ゆふめしにかまますご喰へば風薫
 蛭の口處をかきて氣味よき
 ものおもひけふは忘れて休む日に

凡兆

芭蕉 野水 去來
 蕉 水 來 兆 蕉 來 水 兆 蕉 來 水 兆

迎せはしき殿よりのふみ
 金鏢ツバと人によぼるゝ身のやすさ
 あつ風呂ずきの宵く月の
 町内の秋も更行明やしき
 何を見るにも露ばかり也
 花とちる身は西念が衣著て
 木曾の酢莖名に春もくれつゝ
 かへるやら山陰傳ふ四十から
 柴さす家のむねをからげる
 冬空のあれに成たる北風
 旅の馳走に有明しをく
 すさまじき女の智恵もはかなくて
 何おもひ草狼名のなく
 夕月夜岡の萱ねの御廟守る

蕉水來蕉兆來水兆蕉水來兆蕉來

人もわすれしあかそぶの水
 うそつきに自慢いはせて遊ぶらん
 又も大事の鮓を取出す
 堤より田の青やぎていさぎよき
 加茂のやしろは能き社なり
 物^{名ウ}うりの尻聲高く名乗すて
 雨のやどりの無常迅速
 晝ねぶる青鷺の身のたふとさよ
 しよろく水に蘭のそよぐらん
 絲櫻腹いつぱいに咲にけり
 春は三月曙のそら

兆水 兆水 兆水 兆水 兆水 兆水 兆水

三三三 『猿蓑』元祿三年

鳶の羽もカイツクロヒ刷ぬはつしぐれ
 一ふき風の木の葉しづまる
 股引の朝からぬるゝ川こえて
 たぬきをおどす篠張の弓
 まいら戸に蔦這かゝる宵の月
 人にもくれウず名物の梨
 かきなぐる墨繪おかしく秋暮て
 はきごゝろよきめりやすの足袋
 何事も無言の内はしづかなり
 里見え初て午の貝ふく
 ほつれたる去年のねごぎのしたゝるく

去來

芭蕉 凡史 邦兆 蕉來 邦兆 來兆 蕉來 兆來 蕉來 兆來

芙蓉のはなのはらくとちる
 吸物は先出来されしすいぜんじ
 三里あまりの道かゝえける
 この春も廬同が男居なりにて
 さし木つきたる月の隴夜
 苔ながら花に並ぶる手水鉢
 ひとり直し今朝の腹たち
 いちどきに二日の物も喰て置^名
 雪げにさむき嶋の北風
 火ともしに暮れば登る峯の寺
 ほとゝぎす皆鳴仕舞たり
 瘦骨のまだ起直る力なき
 隣をかりて車引こむ
 りき人を枳殻垣よりくゞらせん

蕉 兆 邦 蕉 來 邦 兆 來 蕉 兆 邦 來 蕉 邦

いまや別の刀さし出す
 せはしげに櫛でかしらをかきちらし
 おもひ切たる死ぐるひ見よ
 青天に有明月の朝ぼらけ
 湖水の秋の比良のはつ霜
^{名ウ}柴の戸や蕎麥ぬすまれて歌をよむ
 ぬのこ著習ふ風の夕ぐれ
 押合て寝ては又立つかりまくら
 たゝらの雲のまだ赤き空
 一構鞆つくる窓のはな
 枇杷の古葉に木芽もえたつ

來 兆 邦 來 蕉 邦 兆 來 蕉 邦 來 兆 邦

三三三 『物の親』元祿三

上御靈にて

半日は神を友にやとし忘
 雪に土民の供物納る
 示石
 水光る蘆のふけはら鶴啼て
 凡兆
 闇の夜わたる表楫の聲
 去來
 なまならずに言ふ月の都人
 景桃
 秋に突折蟲喰の杖
 乙州
 實入よき岡部の早田赤らみて
 史邦
 里近くなる馬の足蹟
 玄哉
 押わつて犬にくれけり炙もち
 石

芭蕉

奉加に出る僧の首途
 白川や關屋の土をふし拜
 右も左も荆蕪咲けり
 洗濯にやとはれありく賤が業
 猫のいがみの聲もうらめし
 上はかみしもは下とて物おもひ
 みな白張のふすま也けり
 高麗人に名所を見する月と花
 春名のうみ邊に鯛の濱焼
 晝下り寝たらぬ空に歸る雁
 雨ほろくくと南吹なり
 米篩隣づからのものがたり
 日をかぞへても駕は戻らず
 くだりはら短夜ながら九十度

好

芭蕉 來兆 州桃 蕉石 春邦 兆來 桃蕉 哉

おさへはづして蚤逃しける
 閑成窓に繪筆を引ちらし
 麓の里のおてゝ戀しき
 首取かとらるべきかの鳥鳴
 野中に捨る錢の有たけ
 月細く小雨にぬるゝ石地藏
 世は成次第いも焼て喰ふ
 萩を子に薄を妻に家建て
 あやの寐卷に匂ふ日の影
 泣くも小さき草鞋求かね
 たばこの形の風にうごける
 眞向に花表を見こむ花盛
 霞にあぐる鷹の羽遣ひ

來邦 桃 哉 來 石 蕉 兆 邦 春 石 兆 邦 來

三四 『猿蓑』元祿四年

餞乙州東武行

梅若菜まりこの宿のとろゝ汁
 かさあたらしき春の曙
 雲雀なく小田に土持比なれや
 しとき祝ふて下されにけり
 片隅に蟲齒かゝえて暮の月
 二階の客はたゝれたるあき
 放ウやるうづらの跡は見えもせず
 稲の葉延の力なきかぜ
 ほつしんの初にこゆる鈴鹿山

芭蕉

乙州 珍碩 素男
 蕉州 蕉男 碩碩 蕉男

大膽	わか	汗ぬ	店屋	春 ^名	灰ま	鑑の	汐さ	懐に	雀か	萩の	すみ	卯の	内藏
にお	かれ	ぐひ	物く	の日	まき	柄に	だま	に手	かた	札す	きる	の刻	頭か
もひ	せは	端の	くふ	仕舞	ちら	立す	まら	をあ	たよ	ゝき	松の	の箕	と呼
くづ	しき	しる	供の	てか	らす	がり	ぬ外	たゝ	る百	の札	のし	手に	聲は
れぬ	雞の	しの	の手	へる	すか	たる	の海	むる	舌鳥	によ	づか	並ぶ	はた
戀を	の下	の紺	がは	る經	らし	花の	づら	秋の	の一	みな	なり	小西	たれ
して		の絲	はり	る机	菜の	くれ		月	聲	して	けり	方	
	土	半		正	去			凡	智				
残	芳	殘	來	秀	兆	來	州	兆	月	州	男	碩	州

身はぬれ紙の取所なき
 小刀の蛤双なる細工ばこ
 棚に火ともす大年の夜
 こゝもとはおもふ便も須磨の浦
 むね打合せ著たるかたぎぬ
 此夏もかなめをくゝる破扇
 醬油ねさせてしばし月見る
名ッ 咳聲の隣はちかき縁づたひ
 添へばそうほどこくめんな顔
 形なき繪を習ひたる會津盆
 うす雪かゝる竹の割下駄
 花に又ことしのつれも定らず
 雛の袂を染るはるかぜ
 猿園
 嵐
 芳
 雖
 風
 殘
 雖
 風
 殘
 芳
 嵐
 蘭
 風
 雖
 風
 殘
 雖
 風
 殘
 芳
 史
 邦
 水
 紅
 野
 水
 羽
 紅

三五

〔春と秋〕元祿四年

水仙は見るまを春に得たりけり

窓のほそめに開く歳旦

我猫に野等猫とをる鳴侘て

ほし忘れたるきぬ張の月

槿にいらぬ丝瓜のからみあひ

仁といはれてわたる白つゆ

聾入に茶賣も己が名を替て

戀に古風の残る奥筋

めづらしき哥かき付て覺ゆらん

形もおかしうそだつ賤の子

此里に持つたへたる布袴

路通

杏杏

翁

龜仙

泉川

執筆

杏

翁

仙

通

翁

餅そなへ置く名月の空
 はらくと葉廣柏の露のをと
 一むれあぐる雁の朝啄
 折ふしは鹽屋まで來る物もらひ
 亂より後には知らぬ年號
 猪猿や無下に見残す花のおく
 雪名のふすまをまくる春風
 此石のうへを浮世にとし取て
 彼岸にいと鐘聞ゆなり
 ゆき違ふ中に我子に似たるなし
 いはぬおもひのしるゝ溜息
 元ゆひのほつれてかゝる衣かづき
 人のなさけをほだに柴たく
 語つぐ萩さく秋の戀しさを

仙翁通川沓 仙翁通川翁通 仙翁通川沓

陀袋さがす木曾の椽の實
 月の宿亭主盃持いでよ
 朽たる舟のそこ作りけり
 唐人のしれぬ詞にうなづきて
 しばらく俗に身をかゆる僧
名ッ飼立し鳥も頃日見えぬなり
 塘の家を降うづむ雪
 あけぼのは筏の上にかく笹
 あかきかしらを撫る青柳
 華さけり静が舞を形見にて
 りぐひすあそぶ中だちの聲

通翁沓川翁通川沓翁通仙翁通沓翁通

三六

『真向翁』元祿四年？』

衣裝して梅改むる匂ひかな
 蝶めづらしき入口の松
 掃よせて消る雪をやかこふ覽
 石の窪に墨を摺けり
 月移る臺の芒を踏敷て
 のた打猪の歸る芋畑
 賤の子が待戀習ふ秋の風
 あかね染干す窓のおも影
 あぢきなく落残りたる國の脇
 寺の物かる罪の深さよ
 振あげて杖あてられぬ犬の聲
 曾良
 前川
 路通
 はせを
 川
 良
 蕉
 通
 川
 良
 通

聳のりはつを町にひろめん
 手作りの酒の辛みも付にけり
 月も今宵と見ぬ驚馬の市
 狩衣をきぬたのぬしに打くれて
 我がおさな名を君はしらずや
 花の顔室の湊に泣せけり
 古巢の鳩の子を持ぬ戀
 講堂名に僧立ならぶ春の暮
 流れにたつる悪水の札
 戸に生膾箸ならず注連の内
 こぼるゝ星の寒き霜風
 宇茸も哀成けり不破の關
 植おくれたる田の中の小田
 子規瘦てや空に鳴つらん

川良通蕉通蕉通蕉通蕉通蕉
 川良通蕉通蕉通蕉通蕉通蕉
 川良通蕉通蕉通蕉通蕉通蕉

我が物おもひ浮世壹人
 此戀をいわむとすればどもりにて
 打れて歸る中の戸の御簾
 柵木に目をさす程の星月夜
 つらのおかしき谷の梟
 火名ウを焼ば岩の洞にも冬籠
 國を半に残す順禮
 衰ふる父の白髪を氣にかけて
 折にのせたる草の初物
 入過て餘りよし野の花の奥
 何が何やらはるのしら雲

蕉川 良蕉 通川 蕉川 蕉川 良蕉 通蕉 良蕉 蕉川

三七

〔折つゝじ〕元祿四年

蠅ならぶはや初秋の日數かな

去來

葛もうら吹帷子の皺

翁

小灯を障らぬ萩にかけ捨て

路通

釣して來たる魚の腸

丈草

一通りみぞれにくもる朝月に

然

只そろくくと脊中打する

來

打明ていはれぬ人を思ひかね

翁

手水つかひに出る面影

通

物干のはづれかゝりて危けれ

草

取そろへたる芝の小肴

然

夕まぐれ烟管おとして立歸り

來

泥打かはす早乙女のざれ
 石佛いづれかけぬはなかりけり
 牛の骨にて牛作らばや
 酒の徳かぞへあげては酔ふさり
 室の入島に尋ねあひつゝ
 みちのくは花より月のさまぐに
 啞の眞似するこちの鶯^名
 餅好の友をほしがる春の雨
 衣小刀にしむる巻薬
 物申は誰ぞと窓に顔出して
 疹してとる跡のやすさよ
 片足づゝ拾ひ次第の古草履
 あす作らふと雪になく鳥
 供多く連しも駕の静也

然 草 通 翁 來 然 草 通 翁 來 然 草 通 翁

菜	佛	食	此	烟	^{名ウ} ほ	御	や	松	崩	畑
を	に	苞	鳥	の	と	簾	さ	割	れ	の
つ	は	ほ	も	中	と	の	し	鑿	井	中
む	か	ど	片	に	ぎ	外	げ	の	に	に
髪	た	く	側	下	す	面	に	見	熊	落
の	見	菅	ばかり	す	鳴	に	並	え	追	る
白	の	笠	立	ば	て	ぶ	け	ぬ	落	い
き	花	の	そ	や	通	侍	さ	露	す	な
曙	を	上	ろ	桶	り	め	け	け	夕	づ
	奉	へ	へ		け		さ	月	夜	ま
	る				り			夜		
來	然	草	通	翁	來	然	草	通	翁	來

三八

『星合集』元祿四年

牛部屋に蚊の聲よはし秋の風
 下樋の上に蒲萄かさなる
 酒しぼる雫ながらに月暮て
 扇四五本書なぐりけり
 吳竹に置なをしたる涼み牀
 蓮の卷葉のとけかゝる比
 笈摺もまだあたらしくかけつれて
 遊行の興をおがむ尊さ
 休み日も瘡ふるひの顔よはく
 溝汲むかざの隣いぶせき
 なま乾なる裏打紙をすかし見る

芭蕉

路通 史邦 丈草 去來 野童 正秀 蕉通 邦草

い つ も 露 も つ 萩 の 下 枝
 秋 立 て 又 一 し き り 茄 子 汁
 薄 縁 た く 僧 堂 の 月
 分 別 の 外 を 書 か る 筆 の わ れ
 疾 に つ ら れ て 浮 世 さ り 行
 散 時 に な ら ね ば ち ら ぬ 花 の 色
 島 を ふ ま る 春 ぞ く る し き
 名 人 心 常 陸 の 國 は 寒 か へ り
 産 月 ま で も か ろ き お も か げ
 う き 事 を 辻 井 に 語 る 隙 も な し
 紺 買 客 の か え る 衣 く
 硝 子 に 減 り 際 見 ゆ る 薬 酒
 橘 咲 ば む か し 泣 か る
 草 む ち に 寢 所 か ゆ る 行 脚 僧

來 童 秀 蕉 通 邦 草 來 童 秀 蕉 通 邦 草

明石の城の太鼓うち出す
 大かたはおなじやうなる船じるし
 力に似せぬ礫かゝるなき
 ゆるされて女の中の音頭取
 藪くゞられぬ忍路の月
名ッ 匂ひ水したるくなりて初あらし
 又も鼯鼠のこねら逐出す
 手に持し物見うしなふいそがしさ
 油あげせぬ庵はやせたり
 鶯の花には寐じと高ぶりにて
 柳は風の扶てぞふく

執
 筆 秀 童 來 草 邦 通 蕉 秀 童 來

小鳥とび立そば垣のうへ
 名月にかりそこなひし戻り馬
 新酒の酔のほきくとして
 語る事なければ君にさし向ひ
 手のふるふとて書なぐる文
 咲花のはれに疊の表がへ
 傘名ほせる宵の春雨
 かへる鴈おのが一くみ打つれて
 日高にとまる足よわの旅
 見るばかり細工過たるもみ佛
 湖水を呑で胸にさはらず
 隠家はもの静なる勢田の奥
 鹿のおどしのつゞく松明
 むさくさと太鼓咄しに月更て

房秀江翁 子江翁 秀房翁 房翁 志翁 房翁 志翁 房翁 志翁

名残を惜む庭のらん菊吟
 みちのくや勅の草紙を書仕舞
 心にたらぬかるき膳立
 相組に男世帯のきれいずき
 おはるゝごと名ウに法華あらそふ
 一振の關より西は能登の國
 淨瑠璃やめて説經にする
 風筋に片はら町を吹まくり
 馬にのりても鎧をかたげる
 誰が藏ぞ白土付るはなの春
 海から見へてのどかなる松翁
 子秀翁房秀子松

四〇

『夕かほの歌』元祿四年？』

古寺蕪月

月見する座にうつくしき顔もなし
 庭の柿の葉みの蟲になれ
 火桶ぬる窓の手際を身にしめて
 別當殿の古き扶持米
 尾頭のめでたかりつる鹽小鯛
 百家しめたる川の水上
 寂寞と参る人なき薬師堂
 雨の曇りに晝蚊ねさせぬ
 一むしろなぐれて残る市の草

芭蕉

尙白

同

蕉

同

白

同

蕉

白

這かゝる子の飯つかむなり
 いそがしとさがしかねたる油筒
 ねぶと踏れてわかれ侘つゝ
 月の前おさへてしるる小屋の者
 桔梗かるかや夜すがらの蟲
 位散る髪は黄色に秋暮て
 大工の損をいのる迂宮
 三石の猿樂やとふ花ざかり
 八つさがりより春の吹降
名雁歸る白根に雲のひろがりて
 うちのる馬にすくむ襟卷
 商人の腰に指たる綿秤
 物よくしやべるいわらしの貌
 蒜の香のよりもそはれぬ戀をして

蕉 同 白 蕉 白 蕉 白 蕉 白 蕉 白 蕉 白 蕉

暑氣によはる水無月の蚊屋
 蜩の聲つくしたる玄關番
 高宮ねぎる盆も來にけり
 薏苡仁に粟の葉向の風たちて
 随分ほそき小の三日月
 たかとり之城にのぼれば一里半
 さても鳴たるほととぎすかな
 西行名の無言の時の夕間暮
 小草ちらく野は遙なり
 薄雪のやがて晴たる日の寒さ
 水汲かへて捨る宵の茶
 窓あけて雀をいろと軒の花
 折掛垣にいろくの蝶

白蕉白蕉白蕉白蕉白蕉白蕉白蕉白

四一 『俳諧會我』元祿四年

此里は山を四面や冬籠り
 青うて細くけぶる炭籠
 いぶせさは衡一種の旅をして
 波に飛込船の遠淺
 降くて今日は無疵に出る月
 残る暑さの門の行水
 小地頭ウの前に並居ル萩薄
 終りのしれぬ下手の舞く
 鈴馬の拍子に乗つて口を取ル
 代繼を祈ル九世の觀音
 侘人に明ケてほどこす小袖櫃
 芭蕉
 淡水
 白雪
 雪丸
 蘆雁
 桃隣
 扇車
 以之
 桃先
 桃後
 支考

あられはらめく谷の笹原
 熊の子の親を尋ねて鳴て居ル
 切ツて附たる庵の三ヶ月
 寒初る圍爐裏普請に取かゝり
 鶉の籠は形がきはまる
 花散りて、靱は二葉に萌上り
 春ともいはぬ火屋の白幕
名やうくと峠にかゝる雲霞
 複子のしめる味噌の曲物
 手を書と童に筆をとらせける
アカシ明松マツを廻す夜仕事
 海少へだゝる水のしはゝゆき
 秋風すごし義朝の墓
 そば切のあれ行儘に道附て

桃

鯉 先 後 雪 同 蕉 水 鯉 之 車 丸 雁 隣 考

小づらのにくき衣くの月
 さまぐの戀は馬刀貝忘レ貝
 乞食と成て夫婦かたらふ
 さしむくる背中の雪を打はらひ
 きれたる弦を押なほす弓
名ッ素湯一ッ御寺見かけて呼びけり
 荷を負ながら牛は寐ころぶ
 めたくと日向の方の花盛リ
 柳の絲がひたる石鉢
 念佛にすゝめこみたる蝶の夢
 又幾度の彌生目出度

丸考蕉雁之車後雪水先隣

四二

〔俳諧深川〕元祿五年〕

深川夜遊

青くても有べきものを唐辛子
 提げておもたき秋の新ラ 鎌
 暮の月ケヤキ 槻のこつばかたよせて
 坊主がしらの先にたゝるゝ
 松山の腰は躑躅の咲わたり
 焙爐の炭をくだす川舟
 祝ウひ日のサ 牙かへりたる小豆粥
 ふすまツカ 摺むで洗ふ油手
 掛ケ 乞に戀のこゝろを持せばや

芭蕉

酒堂 嵐蘭 岱水 蕉堂 蕉水 蕉蘭 蕉

翠簾にみぞるゝ下賀茂の社家
 寒^{トッ}徹す山雀籠の中返^{カヘ}り
 正氣散のむ風のかゝるさよ
 目の張に先千石はしてやりて
 きゆる計に鑑おさゆる
 踏みまよふ落花の雪の朝月夜
 那智の御山の春遅き空
 弓はじめすぐり立たるむす子共
 荷^名とり^カに馬士の海へ飛こむ
 町中の鳥居は赤くきよんとして
 吹もしこらず野分しづまる
 革足袋に地雪踏重き秋の霜
 伏見あたりの古手屋の月
 玉水の早苗ときけば懐しや

堂蘭水 蕉堂水 蕉堂水 蕉堂水 蕉堂水 蕉堂水 蕉堂水 蕉堂水

我が跡からも鉦鼓うち來る
 山伏を切ッてかけたる關の前
 鎧もたねばならぬよの中
 付合は皆上戸にて呑あかし
 さらりく^と霰降也
 乗物で和尙は禮にあるかるゝ
 たてこめてある道の大日
 名^{ウハユ}檣揚ケて水田も暮く人の聲
 蕙片荷に鯨さげゆく
 不斷たつ池鯉鮒の宿の木綿市
 ごを抱へこむ土間のへつゝる
 米五升人がくれたら花見せむ
 雉子のほろゝにきほふ若草

蘭蕉堂水 蘭蕉堂水 蘭蕉堂水 蘭蕉堂水 蘭蕉堂水

西衆の若黨つるゝ草まくら
 むかし咄に野郎泣する
 きぬぐは宵の踊の箔はくを著て
 東追手の月ぞ澄きる
 青鷺の榎に宿す露の音
 ふたりの柱杖あと先につく
 乗掛の挑灯しめす朝風
 汐さしかゝる星川の橋
 村は花田づらの草の青みたち
 塚名のわらびのもゆる石原
 薦名僧の師に廻りあふ春の末
 今は敗れし今川の家の
 うつり行後撰の風を讀興し
 又まねかるゝ四國ゆかしき

堂六蘭蕉堂六蕉蘭堂六蘭蕉六堂

朝露に濡わたりたる藍の花
 よごれしむねにかゝる麥の粉
 馬方を待戀つらき井戸の端
 月夜に髪をあらふ揉出し
 火とぼして砧あてがふ子共達
 先積かくるとしの物成
 うつすりと門の瓦に雪降て
 高觀音にから崎を見る
名ッ
 今はやる單羽織を著つれ立テ
 奉行の鎧に誰もかくるゝ
 葎垣に木やり聞ゆる堀の内
 日はあかう出る二月朔日
 初花に伊勢の鮑のとれそめて
 釣樟若やぐ宮川の上

蘭蕉六堂蕉蘭堂六蘭蕉六堂蕉蘭

四四

〔俳諧深川〕元祿五年〕

支梁亭口切

口切に境サカイの庭ぞなつかしき
 筍見たき藪のはつ霜
 山雀の笠に縫べき草もなし
 嵐蘭
 秋の野馬の様くの形
 利合
 旅人の咄しに月の明わたり
 酒堂
 大戸ウをあげに出る裸身
 袋水
 雞のたま子の數を産そろへ
 桐奚
 あらたに橋をふみそむる也
 也竹
 緑さす六田の柳掘植て
 梁

芭蕉

掛菜春めく打大豆の汁
 細かなる雨にもしほる蝶のはね
 鎧かなぐる空坊の椽
 ばらくと錢落したる石の上
 酒で乞食の成やすき月
 行雲の長門の國を秋立て
 露と朽けん一腰の銚
 西日入ル花は庵の間半床
 萱の二葉のもえてほのめく
 みやこをば去年の行脚に思れて
 兒にまたるゝ釋迦堂のくれ
 咲初めて忍ぶたよりも猿すべり
 鳥のなみだか枇杷のうすいろ
 凡卑して鎖すともなき旅の宿

蕉合堂蕉蘭水堂合蕉 梁竹 奚 奚合堂 奚 奚

清げに注連をはゆる社家町
 日盛に鱈サケ賣聲を夢ごゝろ
 みよしの房フの双ぶ川口
 水つきの稻のしづくに肩重し
 はえ黄カキみたる門カド前の坂
 皮剥ハの物煮て喰ふ宵の月
 上毛吹るゝしろほろの鶯
 谷名づたひ流しかけたる竹筏
 太刀持ばかりふたごゝろなき
 物音も簾静におろしこめ
 盆に算ゆる丸薬の數
 花盛御室の路の人通り
 麥と菜種の野は錦也

竹堂梁合蘭蕉奚竹堂梁奚合

四五

〔約裏〕元祿五年

元祿壬申冬

十月三日許六亭興行

けふばかり人も年よれ初時雨

はせを

野は仕付たる麥のあら土

許六

油實を賣む小粒の吟味して

洒堂

汁の煮たつ秋の風はな

水

宿の月奥へ入ほど古壘

嵐

先工夫する蚊屋の釣やう

筆

才^ウはりの傍輩中に憎まれて

水

焼^{クキ}焦^{コカ}したる小妻もみ消^ス

翁

粽ツつむ笹の葉色に明わたり
 輾テ磴ヲをのぼるならの入口
 半分は鎧はぬ人もうち交り
 船追のけて 蛸の喰キ飽キ
 宵闇はあらぶる神の宮遷し
 北より萩の風そよぎたつ
 八月は旅面白き小服綿
 焼山ごえの雲の赤はげ
 打起す畠も花の木陰にて
 つらも長閑に鶴の卵ワカわる
 春名ふかく隠者の富貴なつかしや
 當摩の壺を酒に酔する
 さつぱりと鱒一本に年暮て
 夜著たゝみ置長持の上

六 堂 蘭 水 翁 六 堂 蘭 水 翁 六 堂 蘭 水

灯の影めづらしき甲待
 山ほととぎす山を出る聲
 兒達は鮎のしら焼ゆるされて
 尻目にかよふ翠簾の女房
 いかやうな戀もしつべきうす雲
 琵琶をかゝえて出る駕物
 有明は毘舍門堂の小方丈
 舌のまはらぬ狐やゝ寒
名ッ
 一すじも青き葉のなき薄原
 篠ふみ下る筥根路の坂
 宗長のうき寸白も筆の跡
 茶磨たしなむ百姓の家
 花の春まつべて廻る神樂米
 七十の賀の若菜莖立

蘭堂六翁 水蘭堂六翁 水蘭堂六翁

四六

『幽蘭集』元禄五年?

大通庵道圓追善

其かたちみばや枯木の杖の長ヶ
 ちどり來て啼よしがきの池
 簗つくりみの作りさす雨やみて
 風のしきりにならすものゝ音
 内洞のくぼかなるよりもるゝ月
 油單をかくる蔦のみぢ葉
 つゝめどもやがてひえたる物喰て
 われをおもはぬ家童子かも
 君はここからすの森を出るまで

芭蕉

夕菊
 苔翠
 友五
 素堂
 路通
 曾良
 堂良

五

聲うつくしき念佛聞ゆる
 毎かはとなかばかたぶく島の御所
 となりをおこす雪の明ぼの
 藪の月風吹たびにかげ細く
 地にいなづまの種を蒔らん
 ひろはれぬ金の氣ながら秋のきて
 無理に望をかけし師の坊
 峰の供はなの岩屋もつらからめ
 登る小鮎をくまむ谷川^名
 わかき身の隠居と成て日は長し
 かほのほくろをくやむ乙の子
 舞衣をむなしくたゝむ箱の内
 猿は木ずゑの松かさをうつ
 苔はえし佛の膝をまくらして

翠通菊良 蕉堂良 通五 翠通翁五 良

ゆめとおもひて覺かぬる夢
 振袖にいつまでおがむ月のかげ
 興じてぬすむ蘭の一もと
 露ふかき無言の僧の戸を明て
 身の賣代を子に残し行
 なき貌をうつすはたけの忘れ水
 奈良にも恥ぬわきしなるらん
 酒を名名ッに付ては人に悪まるゝ
 塵をもおかぬ庭の砂かむ
 くみあぐる御堂の朝時ほのか也
 蚊にせゝられてかぶる笈摺
 清き地に骨を納る花のかげ
 春くれて行香の一時

菊 良 翁 五 通 翠 良 菊 五 翁 翠 通 菊

四七 『桃實集』元祿五年

水鳥よ汝は誰を恐るゝぞ

兀峰

白頭更に蘆靜也

酒翁

中汲の酔も仄に棒提て

酒堂

月の徑に杳拾ふらし

峰翁

鳩吹ば榎の實こぼるゝさらくと

堂翁

板の埃ホコリに圓座かさぬる

堂翁

簾戸ウに袖口赤き日の移り

里東

君はみなく撫子の時

翁東

泣出して土器ふるふ身のよはり

峰東

御念比にて鎌倉をたつ

東堂

門くくに明日の銚りをくばりをき

堂東

蕙踏なとうつす鹽鰯
 山陰をまれに出たる牛の尿
 梨地露けき兒のさげ靴
 名月に雲井の橋を一またげ
 今年の米を背負ふ嬉しき
 花に來て我名は佛徳右工門
 春はかはらぬ三輪の人宿
 陽炎の庭に機へる株打て
 たゝむ衣に菖蒲折置
 きんといふ娘は後のものおもひ
 戀のあはれを見よや鳩胸
 城代の國はしまらず田は餒て
 美濃は伊吹で寒き秋風
 名月に荷鞍をおろす鈴の音

峰翁堂峰翁堂峰東堂翁東堂翁峰

聳なじまする質の出し入
 麥飯に交らぬ食をとりわけて
 徳利引摺川船の舳
 帷子に風も涼しき中小性
 明日御返事を黄昏の文
名ッうつくしき聲の匂ひを似せて見る
 人めにたつとひきなぐる數珠
 一息に地主權現の花盛
 膳に日のさす春ぞきらめく
 鶯は此頃の間にいとひ啼
 歳旦帳を鼻紙の間
 翁 堂 峰 角 堂 峰 角 堂 峰 翁 堂

四八

〔句兄弟〕元祿五年

壬申十二月廿日即興

打よりて花入探れんめつばき
 降こむまゝのはつ雪の宿
 目にたゝぬつまり肴を引かへて
 羽織のよさに行を繕ふ
 夕月の道ふさげ也かんな屑
 出代過て秋ぞせはしき
 網ウツに成きぬはひかゆる槌の音
 肩でやしなふ駕簷かきが親
 足もとに菜種は臥て芥の花

芭蕉

彫棠 晋子 黄山 桃隣 銀杏 棠杏 晋杏

茶を煮て廻す泊瀬の學寮
 下張の反故見えすくまくらして
 つめたいたい猫の身をひそめ來ル
 むづかしや襟にさし込娘の貌
 硯法度とこひやせかるゝ
 夜の雨窓のかたにてなぐさまん
 三寸の殘をし たむ唇
 ま一ツと嚏をはやす朝の月
 らんときくとに遠サカル疫
名愚なる和尚も友を秋の庵
 高みに水を揚る箱戸樋
 山鳥のわかるゝ比はしづか也
 ねぶりかゝる歟合歡の下閣
 かけむかひ機へる床のいとまなし

蕉山 隣 晋 棠 蕉 隣 晋 棠 隣 山 蕉

思はぬ舟に晝の汐待
 氣色まで曹洞宗の寒がり
 焦す疊にいたく手を焼
 見ぬふりの主人に戀をしられけり
 すがた半分かくす傘
 珍らしき星は皎けてよるの月
 渡はじめの聲ひくき雁
 松茸名ッを近江路からは澤山に
 そくさいな子は下くに有
 老たるは御簾より外にかしこまり
 花の名にくしどこが楊貴妃
 付ざしを中でははるゝ桃の色
 こてふの影の跨ぐ三弦

杏 隣 棠 蕉 晋 山 棠 蕉 晋 棠 隣 杏

四九

〔小文庫〕元祿六年

三吟

帷子は日々にすさまじ鵲の聲

史邦

粃一升を稲のこぎ賃

はせを

蓼の穂に醬のかびをかき分て

水

夜市に人のたかる夕月

邦

木刀の音きこえたる居あひ抜

蕉

二階はしごのうすき裏板

水

寒^ウさふに薬の下をふき立て

邦

石丁なれば無縁寺の鐘

蕉

手細工に雑箸ふときかなくなぐづ

水

よびかへせどもまけぬ小がつを
 肌さむき隣の朝茶のみ合て
 秋入どきの筋氣いたがる
 鹽濱にふりつゞきたる宵の月
 無住になりし寺のいさかひ
 持なしの新剃刀もさびくさり
 土たく家のくさききるもの
 花に寐む一疊あをき表がへ
 小姓名の口の遠き三月
 竹橋の内よりかすむ鼠穴
 馬の糞かく役もいそがし
 夕ぐれに洗澤賃をなげ込て
 とはぬもわろしぼよの吊
 椀かりに來れど折ふしゑびす講

蕉邦水蕉邦水蕉邦水蕉邦水蕉邦水蕉邦水蕉邦

此あたゝかさ明日はしぐれむ
 夜あそびのふけて床とる坊子共
 百里そのまゝ船のきぬく
 引割し土佐材木のかたおもひ
 よりもそはれぬ中は生かべ
 云たほど跡に金なき月のくれ
 もらふをまちて鳴のつべい
 摺鉢名ッにうへて色付唐がらし
 障子かさぬる宿がえの船
 北南雪降雲のゆきわたり
 二夜三日の終るあかつき
 考てよし野參のはなざかり
 百性やすむ苗代の隙

蕉水邦水蕉邦水蕉邦水蕉邦水

五〇

『俳諧歌舞師』元祿六年

五吟哥仙

初 茸 や まだ 日 數 經 ぬ 穗 の 露
 青 き 薄 に に ご る 谷 川
 野 分 より 居 む ら の 替 地 定 り て
 さ し 込 月 に 藍 瓶 の ふ た
 鹽 付 て 餅 く ふ 程 の 草 枕
 な で こ は ょ る 革 の 引 は だ
 年 寄 は 土 持 ゆ る す 夕 間 暮
 諏 訪 の 落 湯 に 洗 ふ 馬 の 背
 辨 當 の 菜 を 只 置 く 石 の 上

古翁
 岱 水
 史 邦
 史 邦
 半 落
 嵐 蘭
 翁 水
 岱 水
 史 邦
 史 邦
 半 落
 嵐 蘭

やさしき色に咲るなでしこ
嵐

四ッ折の蒲團に君が丸く寐て
翁

物書く内につらき足音
岱水

月暮て雨の降やむ星明り
史邦

早稻の俵にほめくかり大豆
嵐

胸蟲に又起さるゝ繩の風
岱水

ふごに赤子をゆする小坊主
史邦

花守の家と見えたる土手の下
半落

細き井溝をのぼる若鮎名
翁

春風に太鼓きこゆる旅芝居
嵐

のみ口ならす伊丹もろはく
岱水

琉球に野郎壘の表がへ
翁

是非此際は上ッものやく
史邦

見知られて近付成し木曾の馬士
半落

嫁入するよりはや鳴子引
 袖ぬらす染帷子の盆過て
 月も侘しき醬油の粕
 草赤き百石取の門がまへ
 公事に負たる奈良の坊方
 傘をひろげもあへず俄雨
 見る目もあつし牛の日覆
 出店名へと又も隠居の出られて
 干物つきやる精進の朝
 手拭のまぎれて夫を云つり
 駄荷をかき込板鋪の上
 人つよく毛利細川の花盛り
 聲も賢なり雉子の勢ひ
 翁
 嵐
 半落
 水
 翁
 嵐
 半落
 水
 翁
 嵐
 半落
 水
 翁
 嵐
 半落
 水

五一

『鄙懐紙』元禄六年

いざよひはとり分闇のはじめ哉

芭蕉

鶺鴒船の垢をかゆる澁鮎

濁子

近道に鶏頭島をふみ付て

袋水

肩のそろひし米の持次

依々

見かへせば家根に日の照る村しぐれ

子

青菜煮る香の田舎めきけり

蕉

寄^ウつきのなき女房の貌重き

水

夜すがら濡らす山伏の髪

蕉

若皇子にはじめて草履奉^リ

子

渡しの舟で草の名を聞く

依

鷓の巢に赤き頭の重りて
 ばけ物曲輪掃のこす城
 梅の枝下しかねたる暮の月
 姨まぢ請る後のやぶ入
 ひとり住ふるき砧をしらげけり
 うらみ果てや琴箱のから
 都より十日も遅き花ざかり
 爪をたてたる獨活の茹物
 年禮を御師の下人に言葉して
 烏帽子かぶれば兀も隠るゝ
 持つけぬ御太刀を右にかしこまり
 よれば跳たる馬のふり髪
 夏川やはや宵の瀬を踏ちがへ
 道祖のやしろ月を見かくす

蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子
 水 水 水 水 水 水 水 水
 良 良 良 良 良 良 良 良
 子 子 子 子 子 子 子 子
 會 馬 涼

我戀は千束の茅を積み重ね
 雁も大事にとゞけ行文
 眉作るすがた似よかし水鏡
 大原の紺屋里に久しき
 數多く繋げば牛も富貴也
 冬のみなとにこのしろを釣
 初時^{名ッ}雨六里の松を傳ひ來て
 老がわらぢのいつ脱たやら
 朝ずきを水鶏の起す寐覺也
 筍あらす猪の道
 雪ならば雪車に乗るべき花の山
 はる風さらす谷の細布

蕉葉子 蕉葉子 蕉葉子 蕉葉子 蕉葉子 蕉葉子

五二 『鄙言紙』元祿六年

芹焼やすそ輪の田井の初氷
 擧りて寒し卵産む鶏
 織下す緋をむしろに尋取りて
 涼濁子
 折くすゞむらの柿の木
 蕉
 うす月夜干鯛俵のなまぐさき
 蕉
 汐くむ牛も見えぬあさ霧
 蕉
 露霜の小村に鉦をたゞき入
 蕉
 覆のすへにのこる注連繩
 蕉
 求食飛塊鳩の賑はしく
 蕉
 掘ばひらちにならぬ石原
 蕉
 日ざかりは孫に吸筒提させて
 蕉
 芭蕉

和 田 秩 父 と も 獨 若 黨
 懸 乞 の 來 て は 言 葉 を 荒 け る
 餘 所 よ り く ら き 月 の 枝 折 戸
 蟲 と り と 知 ら で 蟬 の 雇 は れ て
 松 も す 々 き も 念 佛 の 種
 富 ば な ほ 命 也 け り 花 の 陰
 破 籠 は さ め ぬ 鶯 の こゑ
 雪 國 は 春 ま で 馬 の 繫 が れ て
 日 記 つ ま り し 一 帖 の 紙
 旅 瘡 や な が き 五 月 の 船 ど ま り
 名 残 り を か せ ぐ 安 藝 の 廣 島
 音 信 は 見 し ら ぬ 伯 母 も な つ か し く
 元 米 計 る 酒 の 奥 殿
 焼 た て 々 庭 に 體 ず る く れ の 月

蕉 子 葉 蕉 子 葉 蕉 子 葉 蕉 子 葉 蕉 子 葉 蕉 子 葉 蕉 子 葉

まき薬まくも肌寒きかぜ
 寄り聳は假り諸太夫に粧ふて
 うき名は辰の市で戀する
 よひ綺ともやうを褒て詠やり
 葉茶壺直す床の片隅
 名^ウほとゝぎすすはやと蚊帳釣かけて
 湖水もしらむ瀬田の朝駕
 うす雪のうへに霞のころくと
 俵の塵をたゝく著る物
 折る花に子共のすがる袋町
 若松うゆる天神の宮

蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子 蕉子

五三 「炭俵」元祿六年

神無月廿日

ふか川にて即興

振賣の鴈あはれ也ゑびす講
 降てはやすみ時雨する軒
 番匠が殺の小節を引かねて
 片はげ山に月をみるかな
 好物の餅を絶さぬあきの風
 割木の安き國の露霜
 網の者近づき舟に聲かけて
 星さへ見えず二十八日

芭蕉

野坡 孤屋 利牛 野坡 芭蕉 利牛 孤屋

ひだるきは殊軍の大事也
 淡氣の雪に雑談もせぬ
 明しらむ籠挑灯を吹消して
 肩癖にはる湯屋の膏藥
 上をきの干葉刻もうはの空
 馬に出ぬ日は内で戀する
 紮買の七つさがりを音づれて
 堀に門ある五十石取
 此嶋の餓鬼も手を摺月と花
 砂に暖なごのうつる青草
 新名畠への糞もおちつく雪の上
 吹とられたる笠とりに行
 川越の帶しの水をあぶながり
 平地の寺のうすき藪垣
 芭蕉 野坡 孤屋 利牛 芭蕉 野坡 孤屋 利牛 芭蕉 野坡 孤屋 利牛 芭蕉 野坡 孤屋 利牛

輪	ど	目	ち	鯉	風	壁	中	無	ど	又	算	鹽	干
炭	こ	黒	ら	の	や	を	よ	筆	た	沙	用	出	物
の	も	ま	は	鳴	み	た	く	の	た	汰	に	す	を
ち	か	い	ら	子	て	ゝ	て	こ	く	な	浮	鴨	日
り	も	り	と	の	秋	き	大	の	た	し	世	の	向
を	花	の	米	綱	の	て	晦	む	と	に	を	苞	の
は	の	つ	の	を	鷗	寐	日	状	と	む	立	ほ	方
ら	三	れの	揚	ひ	の	せ	も	の	四	す	る	ど	へ
ふ	月	ね	場	か	尻	ぬ	つ	跡	つ	め	京	く	い
春	中	ち	の	ゆ	さ	夕	の	さ	の	産	ず	な	ざ
風	時	み	行	る	が	月	か	き	か	産	ま	り	ら
	分	ゃ	戻		り		ね		ね	ひ	ひ	せ	せ
		く	り				か		か	ひ	ひ	て	て
利	孤	野	芭	孤	利	芭	野	利	孤	野	芭	孤	利
牛	屋	坡	蕉	屋	牛	蕉	坡	牛	屋	坡	蕉	屋	牛

五四 『炭後』元祿七年

むめがゝにのつと日の出る山路かな
 處 く に 雉 子 の 啼 た つ
 家普請を春のてすきにとり付て
 上のたよりにあがる米の直
 宵の内はらくとせし月の雲
 藪越はなすあきのさびしき
 御頭へ菊もらはるゝめいわくさ
 娘を堅う人にあはせぬ
 奈良がよひおなじつらなる細基手
 ことしは雨のふらぬ六月
 預けたるみそとりにやる向河岸

芭蕉

野坡 野坡 野坡 同野坡 同野坡 同野坡 野坡
 野坡 芭蕉 芭蕉 同野坡 同野坡 同野坡 野坡

ひたといひ出すお袋の事
 終宵尼の持病を押へける
 こんにやくばかりのこる名月
 はつ雁に乗懸下地敷て見る
 露を相手に居合ひとぬき
 町衆のづらりと酔て花の陰
 門で押るゝ壬生の念佛
 東風々に糞コのいきれを吹まはし
 たゞ居るまゝに肱わづらふ
 江戸の左右むかひの亭主登られて
 こちにもいれどから白をかす
 方くに十夜の内のかねの音
 桐の木高く月さゆる也
 門しめてだまつてねたる面白さ

芭蕉
 野坡
 芭蕉
 野坡
 芭蕉
 野坡
 同
 芭蕉
 野坡
 芭蕉
 野坡
 芭蕉
 野坡
 芭蕉
 野坡
 芭蕉
 野坡

ひろふた金で表がへする
 はつ午に女房のおやこ振舞て
 又このはるも濟ぬ窄人
 法印の湯治を送る花ざかり
 なは手を下りて青麥の出来
 どの家も東の方に窓をあけ
 魚に喰あくはまの雜水
 千どり啼一夜く寒うなり
 未進の高のはてぬ算用
 隣へも知らせず嫁をつれて来て
 屏風の陰に見ゆるくはし盆

野坡 野坡 野坡 野坡 野坡 野坡 野坡 野坡 野坡 野坡
 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉

五五 『繪履箋』元祿七年

八九間空で雨降る柳かな 芭蕉

春のからすの鳥ほる聲 沾圃

初荷とる馬士もこのみの羽織きて 馬寛

内はどさつく晩のふるまひ 里圃

きのふから日和かたまる月の色 沾圃

狗脊かかれて肌寒うなる 蕉

澁柿もことしは風に吹れたり 里

孫が跡とる祖父の借錢 寛

脇指に替てほしがる旅刀 蕉

煤をしまへばはや餅の段 沾

約束の小鳥一さげ賣にきて 寛

十里ばかりの餘所へ出かゝり
 笹の葉に小路埋ておもしろき
 あたまうつなと門の書つけ
 いづくへか後は沙汰なき甥坊主
 やつと聞出す京の道づれ
 有明におくるゝ花のたてあひて
 見事にそろふふ靱のはへ口
 春無盡まづ落札が作太夫^名
 伊勢の下向にべつたりと逢
 長持に小學の仲間そはく^くと
 くはらりと空の晴る青雲
 禪寺に一日あそぶ砂の上
 槻の角のはてぬ貫穴
 濱出しの牛に俵をはこぶ也

蕉 寛 里 蕉 沾 里 寛 沾 蕉 寛 里 蕉 沾 里

なれぬ 蛾には かくす 内證
 月待に 傍輩衆の うちそろひ
 籬の 菊の名 乗さま ぐ
 むれて 来て 栗も 榎も むくの 聲
 伴僧 は しる 駕の わき
 削名ウツやうに 長刀坂の 冬の 風
 まぶたに 星の こぼれかゝれる
 引立て 無理に 舞するたを やかさ
 そつと 火入に おとす 薫
 花は はや 残らぬ 春の たゞく れて
 瀬が しろの ぼる かげろふの 水

沾 菟 里 蕉 沾 里 菟 里 沾 蕉 菟 里

五六

『炭俵』元祿七年

ふか川にまかりて

孤屋

空豆の花さきにけり麥の縁
 晝の水鶏のはしる溝川
 上張を通さぬほどの雨降て
 そつとのぞけば酒の最中
 寢處に誰もねて居ぬ宵の月
 どたりと塀のころぶあきかぜ
 きりぐす薪アキの下より鳴出して
 晩の仕事の工夫するなり
 娣をよい所からもらはるゝ

芭蕉
 岱水
 利牛
 孤屋
 芭蕉
 利牛
 孤屋
 芭蕉
 岱水
 利牛
 孤屋

僧都のもとへまづ、文をやる
 風細う夜明がらすの啼わたり
 家のながれたあとを見に行
 鮫汁わかい者よりよくなりて
 茶の買置をさげて賣出す
 この春はどうやら花の静なる
 かれし柳を今におしみて
 雪の跡吹はがしたる朧月
 ふとん丸けてものおもひ居る
 不^名屈な隣と中のわるうなり
 はつち坊主を上へあがらす
 泣事のひそかに出来し淺ぢふに
 置わすれたるかねを尋ぬる
 著のまゝにすくんでねれば汗をかき
 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉 芭蕉
 利牛 孤屋 利牛 孤屋 利牛 孤屋 利牛 孤屋

客を送りて提る燭臺
 今のまに雪の厚さを指てみる
 年貢すんだとほめられにけり
 息災に祖父のしらがのめでたさよ
 堪忍ならぬ七夕の照り
 名月のまに合せ度芋畑
 すた〈いふて荷ふ落鮎
名ウ
 このごろは宿の通りもうすらぎし
 山の根際の鉦かすか也
 よこ雲にそよ〈風の吹出す
 晒の上にひばり囀る
 花見にと女子ばかりがつれ立て
 餘のくさなしに董たんぼ
 岱孤芭利孤岱利孤芭利岱
 水屋蕉牛屋水牛屋蕉牛水

五七 『別座鋪』元祿七年

紫陽草や藪を小庭の別座鋪

よき雨あひに作る茶俵

朔日に鯛の子賣の聲聞て

出駕籠の相手揃ふ起

かんくとき有明寒き霜ばしら

槽堀かけてけふも亦來る

住憂て住持こたへぬ破れ寺

とらくと鳴濱風の音

若黨に羽織ぬがせて假枕

ちいさき顔の身嗜よき

商もゆるりと内の納りて

芭蕉

子珊

杉風

桃鄰

八桑

蕉

珊

風

鄰

桑

蕉

山のかぶさる下市の里
 草臥のつゐては旅の氣むづかし
 四日の月もまだ細き影
 龜來ても畑の土のひゞわれて
 雲雀の羽のはえ揃ふ聲
 へらくと足のよだるき花盛
 ひらたひ山に霞立なり
 正月名の末より鍛冶の人雇
 濡たる俵をこかす分々取
 晝の酒寐てから酔のほかつきて
 五がなれば歸る女房
 此際を利上げばかりに云延し
 まんまと今朝は鞆トモを乗出す
 結構な肴を汁に切入て

珊瑚風蕉桑 珊瑚風蕉桑 珊瑚風蕉桑 珊瑚風蕉桑

みせより奥に家はひつ込
 取分て今年は晴^ル盆の月
 まだ花もなき蕎麥の遅蒔
 柴栗の葉もうつすりと染なして
 國^名から來る人に物いふ
 鬧^ウしう一白搗て供支度
 糞汲にほひ隣さうなり
 今の間にじるう成程降時雨
 日用の五器を籠に取込^ム
 扨從衆御茶屋の花にさよめきて
 小舟を廻す池の山吹

蕉 珊 風 鄰 桑 蕉 珊 風 鄰 桑 筆

五八

〔小文庫〕元祿七年

餞別

新麥はわざとすゝめぬ首途かな
 また相蚊屋の空はるか也
 馬時の過て淋しき牧の野に
 四五千石のまつのとて山
 方くへ醫者を引づる暮の月
 躍の左法たれもおほえず
 盆過の比から寺の普請して
 ほしがる者に菊をやらるゝ
 蓬生に戀をやめたる男ぶり

山 店

はせを
 同 店
 同 店
 同 店
 同 店
 同 店
 同 店
 同 店

濕のふきでのかゆき南氣
 丹波から便もなくて啼鳥
 節季が來れど利あげさへせぬ
 雪に出て土器賣を追ちらし
 たゞ原中に月ぞさえける
 神鳴のひつかりとして沙汰もなき
 しやくりがやんで氣がかるうなる
 奥の院をづく花を指のぞき
 けさからひとつ鶯のなく
 春名の日に産屋の伽のつつくりと
 かはりくや湯漬くふらん
 いそがしくみな股立を取並び
 目つらもあかず霰ふるなり
 からびたる櫟林クヌギに日がくれて

店蕉 店蕉 同 店蕉 店蕉 店蕉 店蕉 店蕉 店

佛の木地をつゝむ絲だて
 ごろくと白挽出せばほとゝぎす
 そゝろに草のはゆる竹椽
 羽二重の赤ばるまでに物おもひ
 わかひ時から神せゝりする
 雞をまたぬすまれしけさの月
 鳥はあれて山くずのはな
名ウ日光へたんがら下す蘆のころ
 くれくたのむ弟の事
 ゆふかぜに蒲生の家も敗れ行
 物にせばやとさする天目
 花のあるうちは野山をふらつきて
 藤くれかゝる黒谷のみち

蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店 蕉店

五九

『續猿蓑』元祿七年

猿蓑にもれたる霜の松露哉

沾圃

日は寒けれど静なる岡

芭蕉

水かるゝ池の中より道ありて

支考

篠竹まじる柴をいたゞく

惟然

鶏があがるとやがて暮の月

蕉

通りのなさにみせたつる秋

考

益^ウじまひ一荷で直ぎる鮭の魚

然

晝寐の癖をなほしかねけり

蕉

聳が来てにつともせずに物語

考

中國よりの状の吉左右

然

朔日の日はどこへやら振舞れ

蕉

一重羽織が失てたづぬる
 きさんじな青葉の比の殺欄
 山に門ある有明の月
 初あらし畑の人のかけまはり
 水際光る濱の小鯛
 見て通る紀三井は花の咲かゝり
 荷持ひとりにいとゞ永き日
^名こち風の又西に成北になり
 わが手に脈を大事がらるゝ
 後呼の内儀は今度屋敷から
 喧嘩のさたもむざとせられぬ
 大せつな日が二日有暮の鐘
 雪かけ分し中のどろ道
 來る程の乗掛は皆出家衆

然考蕉然考蕉然考蕉然考蕉然考蕉然考蕉然考蕉

奥の世並は近年の作
 酒よりも肴のやすき月見して
 赤鷄頭を庭の正面
 定らぬ娘のこゝろ取しづめ
 寐汗のとまる今朝がたの夢
 鳥籠名ッをづらりとおこす松の風
 大工づかひの奥に聞ゆる
 米搗もけふはよしとて歸る也
 から身で市の中を押あふ
 此あたり彌生は花のけもなくて
 鴨の油のまだぬけぬ春

蕉考 然蕉考 然蕉考 然蕉考 然蕉考 然蕉考

梅 咲 初 て 立 花 は や ら す
 年 中 を 松 の 内 よ り 料 理 く ひ
 伊 勢 の 状 日 の い そ が し き 春
 上 紺 の 木 綿 合 羽 に 傘 さ し て
 湯 屋 の 手 透 は 八 ッ さ が り 也
 名 月 の も や う 互 に か く し 合
 一 分 で も な き 梨 子 の 切 物
名 玉 味 噌 の 信 濃 に か ぶ る 秋 の 風
 不 足 な 寺 を 無 理 に 持 す る
 右 の 手 の 振 ひ 次 第 に 強 ふ な り
 點 か け て や る 相 役 の 文
 此 宿 を わ め い て 通 る 鮎 の 鮓
 青 田 う ね り て 夕 立 の か ぜ
 平 め な る 石 を 敷 た る 行 水 場

芭

同 蕉 同 化 同 來 同 蕉 同 化 同 來 同 化

給仕をさせて馬夫が食喰
 月くらき夜の鹽梅を星でみる
 聖靈棚はよほど窮屈
 忍ぶ間を踊に出るとおもはせて
 來てうからかす去年の傍輩
 名ッ
 參宮といへば盜もゆるしけり
 につと朝日に迎ふよこ雲
 蒼みたる松より花の咲こぼれ
 四五人通る僧長閑なり
 藪過町の子共の稽古能
 いつくも春にしたきよの中
 來蕉化來蕉化來同化同來

六一

〔砂川集〕元祿七年

元祿七後五月下旬洛參會時

落柿舎即興

牛流す村のさはぎや五月雨

あを葉ふき切梅檀の花

一枚の蕙に晝ねをし合て

つかもこじりもふるきわきざし

つき影に苞の海鼠の下る也

堤おりては田の中のみち

家^ウくはなよ竹はらの間にて

お齋は月に十五はいあり

諷竹

去來

芭蕉

惟然

丈草

支考

來

竹

秋もやゝ今朝からさむき袷がけ
 雁より鴨のはやう來て居る
 抱込て松山廣き有明に
 あふ人ごとの魚くさきなり
 雨乞のしぶりながらに降出して
 紡苧をみたす櫛箱のふた
 極樂でよき居所をたのみやり
 しはうきたなうらき世經にけり
 道もなき島の岨の花ざかり
 半夏を雉子のむしる明ぼの
 川船名のにごりにくだるうす霞
 塔にのぼりて消るしら雲
 賣に出す竹の子掘ておしむらん
 茶どきの雨のめいわくな隙
 然明考草來竹然草蕉考明然
 竹考然明考草來竹然草蕉考明然

このごろの上下の衆のもどらるゝ
 腰に杖さす宿の氣ちがひ
 わらぶきにゆふごの形のおもたくて
 ちらく鳥のわたり初けり
 朝の月起きくたばこ五六ぶく
 分別なしに戀をしかゝる
 蓬生におもしろげづく伏見脇
 かげんをせゝる淺づけの桶
名ッ
 出來て來る青の下染氣に入て
 なにをけらくわらふかみゆひ
 吸物で座敷の客を立せたる
 肥後の相場を又聞てこい
 幾口か花見の連にさそはれて
 ひぐせになりし春のあめかぜ

來蕉然明 竹來蕉然明 竹來蕉然明 竹來蕉然明

六二 『市の庵』元祿七年

閏五月廿二日

落柿舎亂吟

柳 小折片荷は涼し初眞瓜
 間 引捨たる道中の稗
 村 雀里より岡に出ありきて
 塀 かけ渡す手前石がき
 月 残る河水ふくむ船の端
 小 鱗かれて砂に照り付
 上 を著てそこらを誘ふ墓參
 手 桶を入るゝお通のあと

芭蕉

酒堂
 去來
 支考
 丈草
 素牛
 蕉堂

瘡にも食はいつものごとくにて
 大工の邪魔に鋸をかる
 竹樋の水汲かくる庫裏の先
 便をまちて酢徳利をやる
 降出しも忘るゝ雨のしたくと
 惣くやめにしたる洗足
 打鯰を焼と鱈と兩方に
 黒みてたかき檜の木の森
 月花に小き門ンを出つ入つ
 巢名おろす兒の登る腰板
 陽炎に眠氣付たる醫者の供
 新茶のかざのほつとして來る
 片口の溜をそつと指し出して
 迎をたのむ明日の別端

來 堂 蕉 草 堂 蕉 牛 堂 來 草 堂 牛 考 來

六三 『繪猿鏡』元祿七年

今宵賦

野盤子

支考

今宵は六月十六日のそら水にかよひ月は東方の亂
 山にかゝげて衣裳に湖水の秋をふくむされば今宵
 のあそびはじめより尊卑の席をくばらねどしばし
 ば酌てみだらず人そこゝに涼みふして野を思ひ
 山をおもふたまゝかたりなせる人さへさらに人
 を興ぜしめむとにあらねばあながちに辯のたくみ
 をもとめず唯萍の水にしたがひ水の魚をすましむ
 るたとへにぞ侍りける阿叟は深川の草庵に四年の
 春秋をかさねてことしはみな月さつきのあはいを

渡りて伊賀の山中に父母の古墳をとぶらひ洛の嵯
峨山に旅ねして賀茂祇園の涼みにもたゞよはずか
くてや此山に秋をまたれけむと思ふにさすが湖水
の納涼もわすれがたくてまた三四里の暑を凌で爰
に草鞋の駕をとゞむ今宵は菅沼氏をあるじとして
僧あり俗あり俗にして僧に似たるものありその交
のあはきものは砂川の岸に小松をひたせるがごと
し深からねばすごからずかつ味なうして人にあか
るゝなし幾年なつかしかりし人くゝのさしむきて
わするゝにたれどおのづからよろこべる色人の
顔にうかびておぼへす鶏啼て月もかたぶきける也
まして魂祭る比は阿叟も古さとの方へと心ざし申
されしを支考は伊勢の方に住ところ求て時雨の比
はむかへむなどもおもふなりしからば湖の水鳥の

やがてばらくに立わかれていつか此あそびにお
 なじからむ去年の今宵は夢のごとく明年はいまだ
 きたらず今宵の興宴何ぞあからさまならんそゞろ
 に酔てねぶるものあらば罰盃の數に水をのません
 とたはぶれあひぬ

夏の夜や崩て明し冷し物

芭蕉

露ははらりと蓮の椽先

曲翠

鶯はいつぞのほどに音を入れて

臥高

古き革籠に反故おし込

惟然

月影の雪もちかよる雲の色

支考

しまふて錢を分る駕かき

芭蕉

猪を狩場の外へ追にがし

高翠

山から石に名を書て出す

高翠

飯櫃なる面桶にはさむ火打鎌
 鳶で工夫をしたる照降
 おれが事歌に讀るゝ橋の番
 持佛のかほに夕日さし込
 平畦に菜を蒔立したばこ跡
 秋風わたる門の居風呂
 馬引で賑ひ初る月の影
 尾張でつきしもとの名になる
 餅好のことしの花にあらはれて
 正月ものゝ襟もよごさず
 春風に普請のつもりいたす也
 藪から村へぬけるうら道
 喰かねぬ聲も舅も口きいて
 何ぞの時は山伏になる

然考蕉翠 然考蕉翠 然考蕉翠 然考蕉翠 然考蕉翠 然考蕉翠 然考蕉翠

笹づとを棒に付たるはさみ箱
 蕨こはばる卯月野の末
 相宿と跡先にたつ矢木の町
 際の日和に雪の氣遣
 呑ごゝろ手をせぬ酒の引はなし
 著がえの分を舟へあづくる
 封付し文箱來たる月の暮
 そろくありく盆の上藤衆
名ウ蟲籠つる四條の角の河原町
 高瀬をあぐる表一固
 今の中に鏝を見かくす橋の上
 大きな鐘のどんに聞ゆる
 盛なる花にも扉おしよせて
 腰かけつみし藤棚の下

高 考 然 高 翠 然 考 蕉 高 翠 然 考 蕉 高

六四

『とりのみち』元祿七年

元祿七年六月廿一日

大津木節庵にて

秋ちかき心の寄や四疊半
 しどろにふせる撫子の露
 月残る夜ぶりの火影打消て
 起ると澤に下るしらさぎ
 降まじる丸雪みぞれの一しきり
 手のひらふいて糊ざいくする
 夕食をくはで隣の膳を待
 なにの箱ともしれぬ大きさ

翁

木 惟 支

節 然 考 節 翁 考 然 節

宿くで咄のかはる喧嘩沙汰
 うぢく蚤のせゝるひとりね
 佛壇の障子に月のさしかゝり
 樫から弓のおつる秋かぜ
 八朔の禮はそこく仕廻けり
 舟荷の鯖の時分はづるゝ
 西美濃は地卑に水の出る所
 持寄にする醫者の草庵
 結かけて細繩たらぬ花の垣
 足袋ぬいで干す晝のかげろふ
 年頭名にちいさきやつら供させて
 隠すたよりを立ながらきく
 行燈の上より白き額つき
 疊に琵琶をどつかりと置

翁 然 節 翁 考 節 然 考 翁 節 考 然 節 翁

半部は四面に雨を見るやうに
 竹の根をゆく水のさらく
 したくと京への枇杷を荷つれ
 嫁とむすめにわる口をこく
 客は皆さむくてこぞる火燧の間
 置わすれたるものさがすなり
 髪結て番に出る日の朝月夜
 木に十ばかり柿をたしなむ
 名ッ
 満作に中稻仕あげて喰祭
 桶もたらいもあたらしき竹輪
 投うちをはづれて猫の逃あるき
 首にものをかぶる掃除日
 花咲て茶摘初まる裏の山
 つゝじの肥る赤土の岸

考然 節考 翁然 節考 翁然 節考 翁然 節考 翁然 節考

六五

『今日の昔』元祿七年

戊七月廿八日猿雖亭夜席

あれく^レて末は海行野分哉

鶴の頭をあぐる粟の穂

朝月夜駕に漸迫付て

茶の煙たつ暖簾の皺

かつたりと拐を下す雑木取

窮屈さうに袴鳴なり

燭臺ウの小^キ家にかゞやきて

名ぬしと地下と立分る判

焼食をわりても中のつめたくて

猿雖

芭蕉

配刀

望翠

土芳

卓袋

翁

猿雖

望翠

おもひくつして出ぬくらがり
 日フ來コは扇コの要カチ仕習し
 湖水の面月を見晴す
 脇差の小尻の露をぬぐふ也
 相撲にまけて云事もなし
 山陰は山伏村の一かまへ
 崩かゝりて軒の蜂の巢
 焼さして柴取りに行庭の花
 こへかきまはす春の風筋
 坪割の川除の石積あげて
 日なたくに虱とり合
 大名の供の長さの果もなき
 むかひのかゝのおこる血の道
 一升は代を持って來ぬ酒の粕
 土芳 卓袋 蓑刀 配刀 配刀 蓑刀 翁 翁 土芳 卓袋 翁 猿雖 配刀 蓑刀 配刀 蓑刀 翁

盥のそこに霰かたよる
 燈に革屋細工の夜は更て
 颯イシテの聲の棚本の先
 箒木はまかぬにはえて茂る也
 千帷子のしめる三日月
 神主は御供を持ってあがるゝ
 しばらく岸に休むイカダ筏士シ
 衣きて旅する心しづかなり
 加太名へはいる關の別れど
 耳ミ髓スネをそがるゝやうに横しぶき
 行儀のわるき情ひ六尺
 大ぶりな蛸引あぐる花の陰
 米の調子のたるむ二月
 望土芳
 望土芳
 猿雖
 猿雖
 六芳
 翁袋
 望翠
 望翠
 猿雖
 翁袋
 望翠
 望翠
 配刀
 配刀
 配刀
 配刀
 苔蘇
 苔蘇

六六

〔「蜜柑の色」元禄七年〕

戊九月四日會猿雖亭

松風に新酒をすます夜寒哉

支考

月もかたぶく石垣の上

猿雖

町の門道はるゝ鹿のとび越えて

翁

きてはゆかたの裾を引ずる

雪芝

二十日も覺えずに行うつかりと

惟然

此・山かりて時鳥まつ

卓袋

鹿相なる草履の尻はきれかゝり

望翠

床であたまをこそくゝとそる

考

夷講島の袴を手になさげて

雖

喧嘩の中をむりに引のけ
 仕合と矢橋の舟をのらなんだ
 あふげど餅のあぶれかねつる
 心かくと泣子を籠につきすへて
 大工屋根やの歸る暮過
 用の有時はかけ込藪どなり
 雨のふる日の節句ゆるやか
 きわ墨を置直しても同じ貌
 親といふ字をしらで幾秋
 月影に又くり返すせめ念佛
 かりたふとんのあとのひやゝか
 咲花に毎年咄すつれ計
 陽氣をうけてつよき椽けた
 幸と獵の始の雉うちちて

芝袋然雖翠考袋芝考翁袋翠翁芝

内儀の留主に子共あばるゝ
 道場の門のさし入たゝくさに
 一里の船も腹のすきたる
 山はみな蜜柑の色の黄になりて
 日なれてかゝる畑の露霜
 母方にはなれて月の物淋し
 鼠の籠るまき藁のうち
 傍輩の髪を結あふ微の雨
 看出す程さけはしみなり
 小倉とは向ひ合の下の關
 せん度の風に人死がある
 水くさき千日寺の粥食て
 齒^{ニウ}かけ足駄の雪に埋もれ
 漸に今はすみよるかはせ銀

考 雖 翠 翁 考 支 袋 雖 芝 然 考 翁 雖 翠 考

加減の薬しつぱりとのむ
 澁紙をまくつて取れば青疊
 こぼれて生る軒の花げし
 朝夕の茶湯ばかりを尼の業
 飼ば次第に牛の艶づく
 枯もせずふとるともなき桶の枝
 月見にいつも造作せらるゝ
 駕もゆらくとする秋のかぜ
 濱の小家を過る霧雨
 懐に取出して置くとゞけ状
 いそぎの齋に白豆腐にる
 雪隠の窓よりのぞく花の枝
 根笹づたひに鶯の啼

翁考袋雖芝 翠然袋考 然袋考 芝袋考 翁考袋雖芝

六七

『住吉物語』元祿七年』

住よしの市に立てそのもどり
 長谷川畦止亭におのく月を
 見侍るに

升 買て分別かはる月見かな
 秋のあらしに魚荷つれだつ
 家のある野は蒨あとに花咲て
 い つ も の 癖 に この む 中 服
 頃 日 となりて土用をくらしかね
 榎 の 木 の 枝 を おろし 過 たり
 溝 川 に つ け を く 笠 を 引 て みる

芭蕉

畦 止
 惟 然
 酒 堂
 支 考
 之 道
 青 流

火のとぼつたる亭のつきあげ
 蓋とれば椀のうどんの冷返り
 坂下てから一里程來る
 照つけて草もしほるゝ牛の糞
 村の出見世に集て寢る
 嫁とりは女計メナハカリで埒をあけ
 大事がる子の秋の霜やけ
 汁の實を又呼かへす朝の月
 薄の中へ蟾のはひ込
 靱ふせてそれからあそぶ花の陰
 おり名くたへぬ春の旅人
 暖に濱の薬師も明ひろげ
 しるし見分て返す茶筴
 めつきりと油の相場あがりけり

蕉止然堂考止道流蕉考堂然止蕉

又どこへやら羽織著て行
 名號をよう見せたと樽肴
 竹橋かくる山川の末
 大根も細根になりて秋寒し
 若狭戀しう月のさやけさ
 ゆるされて寝れば目がむす夜永さよ
 半造作でまづ障子はる
 氣短に針立ふいと歸らるゝ
 地のしめるほど時雨ふり出す
 雌名ウの此中うせて一羽鶏
 ふり商に棒さげて行
 船入をあぢに住なす三井の鐘
 枯た薪を澤山に焚
 人々の尻もすはらぬ花盛

道堂 考堂 蕉道 止然 蕉道 考堂 道堂 考堂 流道 蕉道 流道 堂止 然蕉 考堂 道堂

唄
の
は
づ
れ
を
雉
子
う
つ
り
行

然

六八

『其便』元祿七年

所思

此道や行人なしに秋の暮

はせを

岨の島の木にかゝる葛

泥足

月しらむ蕎麥のこぼれに鳥の寐て

支考

小き家を出て水汲む

游刀

天氣相羽織を入れて荷拵らへ

之道

酒で痛のとまる腹癖

車庸

片づかぬ節句の座敷立かはり

酒堂

塀の覆にあかき梅ちる

畦止

線香も春の寒さの伽になる

惟然

惠比須の餅の残る二月
 兵の宿する我はねぶられす
 かぐさき茸に交るまつ風
 はらくと山田の稻は立枯れて
 地藏の埋る秋は悲しき
 仕事なき身は茶にかゝる朝の月
 鹽シ餓アの船のとつと入り込
 散花に暮の芝引吹立て
 お傍日永き醫者の見事さ

龜

柳足蕉庸考道然止堂

六九

『菊の塵』元祿七年

芭蕉

白菊の目に立て見る塵もなし
 紅葉に水をながす朝月
 冷くと鯛の片身を折まげて
 何にもせずには年は暮行
 小襖に座右の銘は煤びたり
 みやこをちつて國くの旅
 あらたまる秤に銀をためてみる
 袖ふさぐより親の名代
 垣越にちよつと盥の禮いふて
 普請のうちには小屋で火を焼
 歸らぬにきはまる糠のさめすまし

國女
 諷竹
 渭川
 支考
 惟然
 酒堂
 舍羅
 何中
 はせを
 その女

酒買てのむ早稻のすり初
 はれぐと月の出かゝる杉の森
 夜詰ひけたる町宿の秋
 とれたやら濱から通る肴籠
 彼岸のぬくさは是でかたまる
 青芝はことにもえなつ奈良の花
 出がはり時の一步たしなむ
名通ひ路も横にならねばはいられず
 しどろになをす奥の空櫃
 あさくと色うつくしき重の莖
 雪のかへしの北になる風
 柴賣の隣の小ども連だゝせ
 清藏口に夜のしらび也
 上下の橋の落たる川の音

諷竹 渭川 支考 惟然 酒堂 何中
 諷竹 渭川 支考 惟然 酒堂 何中
 諷竹 渭川 支考 惟然 酒堂 何中

柳	田	敷	餅	老	野	杖	月	嶋	小	う
の	の	か	ち	の	鴉	一	か	の	が	へ
さ	水	ぬ	ぎ	ち	の	本	げ	仕	ま	田
し	の	疊	る	か	そ	を	も	出	へ	の
木	注	の	鍋	ら	れ	道	塞	し	に	中
み	連	積	の	に	に	の	て	の	不	を
ぞ	に	で	あ	娘	も	わ	師	は	断	か
り	流	か	が	ほ	袖	き	走	や	を	る
の	る	さ	り	し	ぬ	ざ	の	る	う	の
び	ゝ	な	の	が	ら	し	夜	打	な	さ
行	花	る	賑	る	さ	し	の	ぐ	ぐ	つ
	盛	な	か	る	れ	し	長	り	り	く
	なる	る	さ	る	て	し	さ	機		
	酒	そ	支	渭	は	何	諷	酒	そ	は
惟	堂	の	考	川	せ	中	竹	堂	の	せ
然		女			を				女	を

芭蕉連句集目次

外篇

一〇	九	八	七	六	五	四	三	二	一
詩あきんど	花にうき世	錦とる	附贅一つ	世に有て	春澄にとへ	鶯の足	實や月	あら何ともなや	此梅に
.....
の歌仙	の歌仙	の百韻	の餘興	の百韻	の百韻	の五十韻	の歌仙	の百韻	の百韻
五七	五四	四六	四三	三七	二九	二四	二二	一三	五

内篇

一	こがらしの	の歌仙	六三
二	はつ雪の	の歌仙	六七
三	つゞみかねて	の歌仙	七〇
四	炭賣の	の歌仙	七三
五	霜月や	の歌仙	七六
六	いかに見よと	の追加	七九
七	海かれて	の歌仙	八〇
八	何とはなしに	の歌仙	八四
九	つくづくと	の歌仙	八七
一〇	日の春を	の百韻	九〇
一一	花咲て	の歌仙	九六
一二	破風口に	の和漢	一〇一
一三	旅人と	の世吉	一〇四
一四	星崎の	の歌仙	一〇八

一五	京までは……………	の歌仙	一一
一六	ためつけて……………	の歌仙	一一
一七	何の木……………	の歌仙	一七
一八	栗稗……………	の歌仙	二〇
一九	雁がねも……………	の歌仙	二三
二〇	かげろふ……………	の歌他	二六
二一	秣負ふ……………	の歌仙	二九
二二	風流……………	の歌仙	三三
二三	かくれ家や……………	の歌仙	三七
二四	五月雨……………	の歌仙	四一
二五	めづらしや……………	の歌仙	四四
二六	あつみ山や……………	の歌仙	四七
二七	馬かりて……………	の歌仙	五〇
二八	種芋や……………	の歌仙	五三
二九	木のもとに……………	の歌仙	五六
三〇	市中は……………	の歌仙	五九

三一	灰汁桶の	の歌仙	一六三
三二	鳶の羽も	の歌仙	一六五
三三	半日は	の歌仙	一六八
三四	梅若菜	の歌仙	一七一
三五	水仙は	の歌仙	一七四
三六	衣装して	の歌仙	一七七
三七	蠅ならぶ	の歌仙	一八〇
三八	牛部屋に	の歌仙	一八三
三九	御明の	の歌仙	一八六
四〇	月見する	の歌仙	一八九
四一	此里は	の歌仙	一九二
四二	青くても	の歌仙	一九五
四三	洗足に	の歌仙	一九八
四四	口切に	の歌仙	二〇一
四五	けふばかり	の歌仙	二〇四
四六	其かたち	の歌仙	二〇七

四七	水鳥よ	の歌仙	三〇
四八	打よりて	の歌仙	三三
四九	帷子は	の歌仙	三六
五〇	初茸や	の歌仙	三九
五一	いざよひは	の歌仙	三三
五二	芹焼や	の歌仙	三五
五三	振賣の	の歌仙	三八
五四	むめがゝに	の歌仙	三一
五五	八九間	の歌仙	三四
五六	空豆の	の歌仙	三七
五七	紫陽草や	の歌仙	四〇
五八	新麥は	の歌仙	四三
五九	猿蓑に	の歌仙	四六
六〇	うぐひすに	の歌仙	四九
六一	牛流す	の歌仙	五二
六二	柳小折	の歌仙	五五

六三	夏の夜や……………	の歌仙	二六〇
六四	秋ちかき……………	の歌仙	二六三
六五	あれ／＼て……………	の歌仙	二六六
六六	松風に……………	の五十韻	二六九
六七	升買て……………	の歌仙	二七三
六八	此道や……………	の半歌仙	二七七
六九	白菊の……………	の歌仙	二七九

緒言

芭蕉の俳諧を出来るだけポピュラなものにしたいといふ岩波書店の希望に副うて、私はこの『芭蕉連句集』を編んだ。

編輯に當つてまづ考へた事は、是を「外篇」と「内篇」との二つの群に大別する事である。芭蕉の藝術が、そのあらゆる滓と屑とを振り落して、純粹に藝術的なものになつた貞享元年の『冬の日』から、芭蕉が死ぬ元祿七年までには、丁度十年の日子が挟まつてゐる。その十年間の作品の中から此所に選み上げて來たものを、「内篇」と名づける。然も芭蕉の藝術には、『冬の日』以前に、醗酵の、若しくは準備の、——もつと無遠慮に言へば、穢濁と未熟との、可也に長い過去があつた。その長い過去の作品の中から適宜に選み出されたものが、この「外篇」である。「外篇」十篇は、簡單ながら、凡人芭蕉がどういふ風にして非凡人芭蕉になつて行つたかを、具體的に提示しようとする。

「内篇」六十九篇は勿論、純粹に藝術的なものになつた芭蕉の藝術が、十年の間に、どういふ風にその姿を變へて行つたかを示さうとするものである。選擇に際しては、言ふまでもなく、全體が全體として藝術的に價值を持つてゐるといふ事が第一の標準とされた。然し俳

諧は、外の多くの藝術と違つて、自分一人だけではなく、多くの他人も是に参加して築き上げる藝術である。従つてそれは、常に芭蕉によつて指導されるとは言つても、参加する他人の力量次第で、必ずしも常に全體として優秀なものであるといふ譯に行かない。さういふ場合私は、目標を芭蕉に置いて、其所に含まれてゐる芭蕉の附句が、藝術的に優秀であるかいか、芭蕉の生活を覗き込ませるものを持つてゐるかゝるか、芭蕉の藝術のある時期を濃厚に代表してゐるかゝるか、——その他それに似た標準によつて、その俳諧の取捨を決定する方針をとつた。

本文に就いては、出來得る限りは、最も古い板本に據るといふ事を原則としたけれども、なほ力が及ばないで、寫本や勝峯晋風君の『俳書大系』本などに救ひを求めたものも少くない。「内篇」一〇、一六、二二、三三、三五、三七、五〇、五一、五二、六一、六六、六九などは凡て『俳書大系』本のお蔭を蒙つたものである。

本文の濁點は多く私の手で施した。經驗のある人は誰でも知つてゐる様に、昔の板本では、習慣として、ひどく濁點を儉約する。然しそれをそのまま印刷に付するのでは、恐らくポピュラなものにするといふ趣旨に叶はない。然し濁點のないものに濁點を施すといふ事は、一見なんでもない事の様でゐて、その實非常に骨の折れる、また非常に危険な仕事である。是は言語に關する絶大の知識を豫想する。私は、我流の解釋や一己の讀癖や若しくは單なる

無識から、不注意な、若しくは非常識な、濁點の施し違ひがない事を祈るのみである。

假名遣、振假名、假名の出し入れは、凡て元のままにした積である。漢字も出来るだけ元のままにして置く原則によつたけれども、一つ二つは敢て訂正を試みたものもある。例へば「内篇」三八の脇句の蒲菘（かぶ）といふ字は、まづ「蒲」と書いて、下に「陶」の字に草冠をきせた不思議な漢字が書いてある。私は「蒲」の字は保存したが、その下の字は菘の字に改めてしまつた。是は或はぼどうと讀んで芋の一種をさすのかも知れないとも思つたが、恐らくさうではなく、多分菘をさすものに違ひないと想像したからである。然し例へば「外篇」四の裏の十二句目の「穀」といふ字や、「外篇」六の二の裏の一句目「の穀」といふ字などは、無論ない字ではあるけれども、わざわざ新しく活字を作つて貰ふ事にした。かういふ創造には、時代も出てゐれば、又ある意味から言ふと、俳諧もある様な氣がするからである。——然しかういふのは、或はポピュラなものにするといふ趣旨には叶はないものであるのかも知れない。

板本、寫本の種類によつて、本文にいろいろの相違がある。然し私は前にも言つた様に、本文は原則として最も古い板本に據る事にした。従つて一切の責任は、その板本が脊負ふべきものである。私は「外篇」「内篇」とともに、一一番號を打つて、番號の下に小さくその板本（已むを得ない場合は寫本）の名前を書いて、出典を明にして置いた。然し例へば「外篇」

一の様なもの、『梅の牛』の板本よりも種彦の寫本の方が、遙に正しい部分を幾つか持つてゐる様である。裏の十二句目の「松の嵐の響くに似たり」(『梅の牛』は「松の嵐の響く耳たぶ」(種彦寫本)に如かない。二の表の四句目の「ほりこむ返事うらめしの中」(『梅の牛』よりは「かみなりの太鼓うらめしの中」(種彦寫本)の方が、よささうである。同じく十四句目の「焰魔の町く引渡す霧」(『梅の牛』は「焰魔の町く引渡す霧」(種彦寫本)の誤であるに違ひない。三の表十二句目の「腸もちの木」(『梅の牛』は、必ず「腸もちの木乃伊眼前の月」(種彦寫本)の誤である。然も種彦の寫本よりも『梅の牛』の方が、より古い板本であるといふ理由から、明白に誤と推定されたものには手を加へて、私は敢て『梅の牛』の本文を用ひる事にしたのである。是に似た改訂は、極めて僅かではあるけれども、外の部分でも行はれてゐる。

出典の下に記した年代は、その俳諧が制作された年代の推定を示すものである。この年代推定の大部分は、まづ信用されて可いものではあるが、まゝ漠然たる推定をも含んでゐる事を斷つて置きたい。年代の下に疑問符を添へたものは、特に再應の考證を必要とするものである。例へば「内篇」一二の和漢の様なもの、それを載せた『三日月日記』に「元祿八月八日終」とのみあつて、元祿の何年といふ、その年數が書かれてゐない。然るに芭蕉は、元祿元年の八月八日も元祿二年の八月八日も三年も四年も、江戸にはゐなかつた。さうして素

堂は江戸にゐた人である。従つてもしこの「元祿八月八日終」を信じるとすれば、是は元祿五年か元祿六年かの制作にかかるものでなければならぬ。然しそれにしてはこの附句には、より多く『曠野』の味がある。とすると、是は元祿ではなく、貞享の制作にかかるものでなければならぬ。然も貞享とすれば、是は、元祿に近い貞享とするのが最も妥當である様に思はれる。——かうして是は貞享四年といふ事に推定されたのであるが、然しこの推定が「元祿八月八日終」を十分否定し得るためには、もう少し何か外の確實な證據が援用されなければならぬ。それ故この「内篇」一二の貞享四年といふ推定年代の下には、疑問符が添へられてゐるのである。もつとも同じ疑問符が添へられてゐるものでも、例へば「内篇」四六の元祿五年といふ推定などは、もつと漠然たる推定である。

昭和五年十月二十六日

小宮 豊 隆